
それはまるで少女のように

浅葱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはまるで少女のように

【Nコード】

N6882Q

【作者名】

浅葱

【あらすじ】

僕は誓った。それは妹を守りたいという純心。「俺は、お前が欲しい。」。そんな言葉で、僕を乱さないで。

プロローグ

僕は、世界でたった一人の妹の為に存在しているのだと、心の底から思う。

「どうしたの？ルー。」

リーが僕を見ている。不思議な顔をして。綺麗だと、そう思った。

僕の妹、リーティア・オルソンは、家族の鼻肩目を抜きにしても美しく、そして可愛らしい女の子だった。

僕たちは捨て子だった。両親の顔など全く覚えてはいないが、それは僕とリーティアが8歳と6歳のときだった。

泣きじゃくるリーの手を引いて辿りついたのが、このオルソンの家だった。

オルソン家の人々は、家督であるモルテナ・オルソン卿を筆頭に、誰もが優しかった。屋敷の門の前で二人、途方に暮れているのを奥方であるサーシャ・オルソン様が見つけてくださらなければ、僕たちはきつとどこかで死んでいたことだろう。

オルソン卿は僕たちを見て、すぐにこの屋敷に住むよう言ってくれた。そして驚くことに、僕たち二人を養子にと望んでくれた。

リーはオルソンの養女となり、唯一の令嬢となった。美しいリーティア嬢は、すぐに皆に受け入れられた。

そして僕は、彼女を守る執事になった。

最後までオルソン卿は僕も養子にと言ってくれたが、僕はそれを頑なに拒んだ。リーを守りたい。ただ、その一心だった。

「…ルー？」

心配そうに見つめる妹に、僕は精いっぱい優しく微笑んだ。

「何でもありません、お嬢様。」

もう癖になりつつあるそれに、リーは拗ねたように文句を言った。

「もう！お嬢様って呼ぶの止めてよ、ルー！」

ごめんごめんと頭を撫でれば、リーは花のように笑って言った。

「大好きよ、ルー。」

全く…。君の笑顔にどれだけの男共が恋をするか知ってるのかい？
そんなことを思いながらも、僕も笑顔で応える。

「僕もだよ、リー。」

プロローグ（後書き）

初めまして。拙い文章ではありますが、楽しんでいただけたでしょうか？

まあ、物語はまだ始まったばかり……いえ、まだ始まってさえもないのですね。

第一話

僕の仕事は、お嬢様を起こすことから始まる。コンコンと扉を叩くが返事はない。小さく咳払いを一つすると、僕は勢いよく扉を開け放ち叫ぶ。

「リーティアお嬢様！朝ですよ！」

屋敷中に木霊するそれは、この屋敷にとっては幸せな日常だった。

「うん。うるさいよお、ルー。」

「こうしなけりや起きられないお嬢様が悪いんでしょう！」

まだ完全に開け切れていない目を擦りながら、渋々というようにリーティアが起きる。カーテンの隙間から零れる朝日に、眩しそうに一瞬顔を歪めたが、すぐに慣れたようで、僕に言った。

「今日もいいお天気ね。」

そうだね。と返せば、文字通り太陽のようにリーは笑った。

リーの仕度がすみ、二人でリビングへと向かう。そこに入れば、出来たての朝食と、嬉しそうに笑うオルソン夫妻が待っていた。

「今日も大きな声だったわね、ルー。」

「毎朝騒がしくてすみません。」

「あら、私の毎朝の楽しみなのよ？ルーの声は可愛いもの。」

「そんなことないですよ。」

苦笑して首を傾げれば、サーシャ様は本当なのにと笑う。おっとりとした雰囲気、優しい人だが、僕を可愛いと言って憚らない。すると横から、

「そうだぞ、ルー。もっと大きくてもいいくらいさ。」

こちら柔らかい雰囲気を持つ、モルテリア様。オルソン卿、その人だ。

二人はおしどり夫婦という言葉がとてつもなく似合う。そしてモルテニア様もまた、僕を可愛いと言って憚らない。

そして誰よりも僕を可愛いと思っているのが、

「ルーが可愛いのは当たり前よ!」

妹である、リー。

そうして、少し居心地の悪さを感じながらも、オルソン家の朝食は進んでいった。

リーの足がぱたぱたと揺れている。自室に戻った僕たちは、何を
するでなく、ただぼーっとしていた。リーは呟くように僕に話しか
ける。

「ねえ、ルー?」

「なんですか?お嬢様。」

「…ルー。」

「…なんだい?リー。」

満足気にリーは言った。

「お散歩に行きたいわ。」

今思えばこれがいけなかったのかもしれない。これから起こる知らない未来、それを知っていたらきっと僕は、散歩になんて行かなかっただろう。

リーを責める気なんて更々ないけれど。

第一話（後書き）

あれ？何も起こらなかった。と不思議に思っております作者です。
あまりにもまとめる能力がなさ過ぎて困ったものです。

きっと、次の話で何か起こってくれるでしょう…かね？

第二話

オルソンの庭はよく手の行き届いた綺麗なところだ。花も木々も揃えられてはいるけれど、それでも自然の息吹を感じずにはいられないほどに生き生きとしていた。

僕とリーのお気に入りは、垣根に囲まれた小さなベンチ。奥まった見えにくい場所にあつて、それが僕たちの秘密であるかのように感じていた。そこに腰かけ、リーと二人きりで話するのは、僕にとって一番大切な時間だと思っている。

「ねえ見て、ルー。たんぼぼの綿毛！」

しゃがみ込んでリーが見つけたのは、大きくて丸いたんぼぼの綿毛。それを手折ると、リーはそれを吹いた。僕に向かって。

「うわぁ！止めるよ、リー！」

「ルーったら綿毛だらけ！」

「リーのせいじゃないか！」

お腹を抱えて笑うリーと、綿毛を掃いながら怒る僕。その耳に聞こえてきたのは、垣根を越える音。慌ててその方向を向けば、そこにいたのは銀髪の綺麗な男の人だった。

「どちらさまでしょうか。」

至極落ちつきを装い、逸る鼓動に鞭打って、僕はゆっくりとリーを後ろに隠しながら聞いた。

「……」

けれど男は喋らない。少し驚いているようにも見えた。

男は身なりが整っていて、その容姿からもどこかの貴族かと思われた。恐らくはモルテニア様のお客人。しかし、怪しい。

「あ、あの……」

訝しげにそう尋ねれば、男は身体を一瞬震わせたが、すぐに落ちついた表情を見せた。

「すまなかつた。お前は…」

「なんでしょうか。」

先ほどから思っていることがある。この男、僕を疑っている。それはまずい。非常に。それに気がついたのか、リーが口を挿んだ。
「何か、御用かしら？」

男はリーを一瞥すると、いや…。と言い淀んで、また僕を見る。ほんの少し、けれど長く感じた沈黙。それを破ったのは、正規の道からやってきたモルテナ様だった。

「おお。ここにいたのか。」

「お父様！」

「おや、ユリアス殿もいらっしゃったのか。」

垣根の間にいる奇妙な男を見て、モルテナ様もいくらか驚いたようだった。名前を知っているということは、やはりお客入だったか。

「すみません、オルソン卿。」

「いやいや、かまいませんよ。とりあえず移動しましょう。ここでは話も出来ません。」

「…はい。」

モルテナ様はお客入、ユリアス様を伴って移動するようだ。モルテナ様はこちらを向くと、僕とリーも来るよう言った。

「リーティア、ルー。君たちも来なさい。」

「ええ、お父様。」

「はい。」

恐らくこの男に害はないだろう。リーはモルテナ様の後ろを歩いているし、問題はない。ほっと胸を撫で下ろしたのも束の間、誰かの手が僕の髪に触れた。

「！？」

その誰かは、案の定と言えばおかしいが、ユリアス様だった。

「な、なんでしょうか。」

知らぬ男に髪を触られるなど、初めてのことだった。頭を撫でら

れることはあっても、するりと髪を指で梳かれたことはない。動揺している僕に、ユリアス様は、

「綿毛だ。」

とそれをつまんだ指を見せた。

「は、はあ。ありがとう、ございます。」

ユリアス様はそのまま無言で立ち去ってしまった。変わった人だと、思わずにはいられなかった。

そのユリアス様が何を思っているかなんて、知ることもなく。

第二話（後書き）

何かが起こったわけではない。しかし、起こる予感がする。それでいいのだ。

第三話

オルソンの屋敷に唯一存在する客間に、8人の人間がいる。

主であるモルテニア・オルソン卿、その妻サーシャ。二人の令嬢、リーティア。そして先ほどの銀髪の男、ユリアス。ユリアスの隣には彼ほどではないにしろ、整った顔立ちの茶髪の男性が座っていた。後の3人は、執事長のローク、メイドの二ナ、そして僕。

会話の口火を切ったのは、またしてもモルテニア様であった。

「さて、今日は我が家に何の御用時ですか？」

それに応えるのは茶髪の男。

「いきなりの訪問、申し訳ありません。私は、モーリス・オーランドと申します。」

「ほう。ということは、オーランド伯爵の……」

「はい、伯爵は私の父でございます。……性急ですが、用件をお話ししても？」

「ええ、かまいません。」

茶髪の男、モーリス様はちらりとこちらを見る。あまり従者には聞かれたくない内容らしい。それを察したのか、モルテニア様は僕たちを下げる合図をした。僕と執事長とメイドの3人は、静かにその場を立ち去った。

下がれと言われ、部屋を出たものの、僕は部屋の近くを離れられずにいた。

「リー……大丈夫かな。」

微かに話し声は聞こえるけれど、内容まではわからない。リーは令嬢だけど、かといって権限があるわけじゃない。リーが下げられなかったということは、少なからずリーにも関係のある話なのかもしれない。

「心配だなあ…。」

柱の陰でため息吐いてることしかできないなんて。そんな風に考えていたら、扉の開く音が聞こえた。

「…リ…違った。」

出てきたのは、ユリアス様一人だった。ユリアス様は僕を見つけると、ものすごい速さで寄ってきた。

「俺ではだめなのか。」

「うえ？」

逃げる間もなく、僕は柱とユリアス様の間に挟まれ身動きが取れなくなっていた。

「え、あの、ユリアス…様？」

「…。気に入らん。」

「は？」

眉間に皺を寄せて、ユリアス様はじつと僕を見つめている。居た堪れないのだが。すると、ユリアス様は信じられない言葉を発した。

「お前は男か、女か。」

服見ればわかるだろう。

「…男ですが。」

すると、ユリアス様の眉間の皺はさらに深くなる。

「もう一度聞く。お前は男か、女か。」

「いや、だから…。」

男です。と答えようとしたその瞬間。

「ちよつと！私のルーテシアに触らないで！」

顔を真っ赤にして怒るリーの姿が目に入った。でもさ、リー。今、言っではならないことを言っただよね？

「…ルー、テシア？」

リーを見ていたユリアス様の双眸が、ゆっくりとこちらへ向く。その瞳には、明らかな確信と、怒りが混じっているようだった。

「うあ、あの、僕は…。」

そう言い淀んでいると、さらにユリアス様の顔が近づいてくる。

どうしたら…。焦る僕の視界に、突き飛ばされるユリアス様を見た。少し視線を下げれば、リーがいる。恐らく、突き飛ばしたのはリーだ。

「お前…。」

地を這うような低い声で、怒りを隠す様子もないユリアス様に、リーは負けじと声を上げる。

「ルーテシアが綺麗だからって馬鹿なことしないで！」

「リー、落ちついて…。僕は別に…」

頼むからもう喋らないでくれ。泣きそうになりながら、僕はリーを諷める。でも、リーの口は止まらない。

「何言ってるの！？ルーは綺麗よ！」

「いや、そうではなく…。」

それ以上はお願いだから止めてくれ！

「ルーは私の自慢の姉さんよ！」

「…姉？」

ユリアス様の瞳に光が宿るのを、僕は見た。…ああ、ばれてしまった。

そうなんですよ。僕は男ではなく、れっきとした女なんですよ…。

第三話（後書き）

WAO。やっと始まった感じですか。ありがちな展開とかわれちゃってしまっているかも…でも、王道が好きなんですよすみませぬ。

第四話

い、痛い…。視線が痛い…。

リーとユリアス様は未だにお互いを睨み合っている。そして、その二人に挟まれた僕を、モルテニア様、サーシャ様、モーリス様、そして騒ぎを聞きつけてきた多くの使用人たちがじっと見ている。「これから何が起きるんだろう。」
という目をして。

「あのう…。」

僕は控えめに手を上げて、発言しようと試みる。すると前にいる二人は、驚いたようにこちらを向いたかと思うと、すぐに優しい声色で言った。

「どうしたの？ルー。」

「どうかしたか？ルーテシア。」

言わずもがな前者がリーで、後者がユリアス様。だが、ユリアス様は何故その…

「何故その名で呼ぶの！？」

あ、うん。そうだよ、リー。ありがとう、言ってくれて。

僕がうんうん。と頷くと、ユリアス様は不機嫌そうに

「俺がそう呼びたいから。」

なんで？とユリアス様以外のここにいる全ての者がそう思ったであらう。

廊下での口論は果てしなく続くようだった。主に僕のことです。

「その続きはお部屋の中でしましょう。」

おっとりとした口調で、サーシャ様が言った。仕方ないなとリーとユリアス様が続く。え、口論は止めないんだ？

「お前も来なさい、ルー。」
モルテニア様も、少し苦笑した風に僕を誘った。行きたくはないけど、行くしかないだろうな。

先ほどの客間に、今度は僕を交えた面々が揃っている。居心地が悪いの、僕がリーとユリア様に挟まれて座っているからだろう。僕は本来、こういう場での着席は認められていない。主である、モルテニア様の許可無しに執事が座するなど言語道断。けれど、リーが僕の腕を掴んだままに、ルーは私の隣と言って長椅子に座らせてしまったのだ。元々三人用の長椅子は、僕の隣がもうスペース残っていて、そこにユリア様がさも当たり前かのように座ってしまった。だから、なんで？

リーとユリア様の口論、いや口喧嘩がまたしても僕を真ん中に始まった。喧嘩の理由である当人の僕は、状況が一切理解出来ないというのに。

そつと周りに目を向ければ、モルテニア様は複雑そうなお顔をされていて、サーシャ様は楽しそうに笑っていた。モーリス様に至っては、今にも吹き出しそうなのをこらえている様子だった。

「リーティア、もうそこら辺で止めておきなさい。」

モルテニア様が呆れた様子で提言する。そして、モーリス様もユリア様に笑って言った。

「殿下ですよ。みつともない。」

ぐっ、と唸ったかと思えば、その瞬間に二人とも黙ってしまった。やれやれと言うように、モルテニア様が首を振る。そして、僕にとつての禁忌を言った。

「リーティア、あまり無礼なことは止めなさい。殿下はお前の夫となる方かも知れないのだぞ？」

それって…。

「私は、結婚なんて…！」

「させません！」

リーの言葉を遮って、僕は立ち上がって叫ぶ。そして、ユリアス様に…否、ユリアスに向かう。

「リーティアは貴方にはあげません。結婚も、させません！」

「ルー！」

リーは感極まって僕の腰にしがみつく。そうさ、リーは渡さない。そうしてユリアスを睨んでいると、ユリアスは嬉しそうに微笑んだ。そして椅子から立ち上がり、僕に向かう。

「な、なんですか。」

僕のそれには答えず、ユリアスは恭しく膝をついた。その目は僕だけを捉え、大きな手は僕の手を取る。その一連の動作はあまりに美しく、誰にも邪魔することの許されない儀式のようだった。

「リーティアは、知らない。」

ユリアスは僕を見たままそう言った。その言い方は気に入る言い方ではなかったが、はっきりとリーを拒絶したのはいいことだと思った。でも、そこで終わるかと思っていた言葉は再度紡がれ、僕の耳へと届く。

「俺が欲しいのは、お前だ。お前が欲しい、ルーティア。」

なんでそうなる。周りから見た僕は、恐らくこれでもかというほどに目を丸くしていたことだろう。

ユリアスは手に取ったままの僕の手の甲に、ちゅっ。と生々しい音をたててキスをした。

その日、悲鳴とも怒号ともとれる叫び声が、オルソンの屋敷に響いた。

第四話（後書き）

おう。作者の意図しないところで、なんとなく甘い展開になっている気がする。でもそんな展開好きだったりする。

第五話

「な、な、ななな…！」

なにをする！と言いたいの言葉にならない。取られている手を引き抜きたいのに、体が動かない。

「…っ！ルーを離しなさい！」

リーが噛みつくかのような勢いで、僕とユリアスを引き離す。手に残る感触と熱が、いやにそれを主張していた。生まれてこのかた膝をつかれたこともなかったし、ましてやキ、キスなど…。一気に押し寄せる現実、目を逸らしたくなる。

「…。」

ユリアスは何が不満なのかしかめっ面をしているし、リーはかなりの機嫌斜め。そんな中で聞こえたのは、サーシャ様の穏やかなあらま。だった。

「殿下はそこにおられる、ルーテシア嬢を気に入られたようだね。」

「

モーリス様が楽しそうに言う。この人にも女だとばれているのか…まあ当たり前かもしれないが。

そこまで思っ、はっと気がつく。恐る恐るユリアスを見て、恐る恐る聞いた。

「…殿、下？」

「ん？ああ。」

あっけなく認めた。いやいや、デンカとかいう名前かもしれない！そんな淡い期待を打ち砕くかのようにユリアスは続けた。

「俺はクライア王国第二皇子、ユリアス・クライアだ。」

誰か嘘だと言ってくれ。

リーを渡すものかと啖呵を切った相手は、この国の王子だった。嘘ではないことは、モルテニア様たちの反応や話の内容からも明らかだった。

「…謝りませんからね。」

僕は力の限りでユリアス…ユリアス殿下を睨んだ。王子であろうがなかるうが、リーティアは渡さない。目で語るとはこういうことだ。

「…なんだ、やきもちか？」

王子には通用しないらしい。どうしたらその答えに行きつくかが甚だ疑問だが。

はぁ、とモーリス様がため息を一つ。そしてモルテニア様に向き合う。

「ルーテシア嬢はオルソン家には属しておられないのですか？」

その質問に、モルテニア様もサーシャ様も、そしてリーティアも苦笑する。

「ルーは、私の実の姉さんだけど、オルソンの名は持っていないわ。」

「何故？」

「それは…。」

どう答えてよいものかリーは迷っているようで、モルテニア様からサーシャ様、そして僕に視線を巡らせると困ったように目を伏せた。

「僕が、それを望んだからです。」

リーの答えを待っていたモーリス様の視線が僕へと向く。そして真っ直ぐ聞いてきた。

「女であることを隠し、ただの執事として生きることを望んだと？」

「まあ、そういうことです。」

「しかし…。」

そこまで言ったモーリス様を、モルテニア様が遮る。

「リーティアの為なのですよ。」

「モルテニア様！」

「お父様……。」

モルテニア様は僕たち二人に微笑みながら続ける。

「二人が元々、捨て子であつたのはご存知ですか？」

「……ええ。オルソン邸の前にいたのを、保護したと。」

静かに、そして苦しく。部屋に響くモルテニア様とモーリス様の声が、冷たく紡がれる。

「二人とも、死ぬ寸前というところでした。」

何故かそれに一番動揺したのは、ユリアス殿下だった。僕たちはただ、二人手を繋いで聞いていた。

「二人が屋敷の前にいるのを見つけたのは本当に偶然で、ルーシアは妹を守ろうと必死に私たちを拒みました。……仕方ないことです。その時点で、彼女たちの体は限界を越えていて、リーティアは視力をほとんど失っていました。目の見えなくなっていました。リーティアを守らなければ。ルーシアの心は、それで溢れていたんです。」

淡々とそこまで話したモルテニア様は、苦しげに口を閉ざされてしまった。それを氣遣うように肩を抱きながら、そして。とサーシヤ様が続ける。

「そして、どうにかして二人を屋敷に招き、治療を始めました。何ヶ月かをかけてようやく、二人の体調も元に戻りつつあり、いい機会だと子供のなかつた私たちの養子にと望みました。」

「二人とも、ですか。」

「ええ。ですが……。」

サーシヤ様は言葉を詰まらせる。モーリス様は心得たとでも言うように、頷き言った。

「ルーテシア嬢がそれを断つたということですね。」

「……はい。」

長い沈黙の中。僕たちが拾われてからの十年を、僕は思い出していた。

初めは、ただただ恐ろしかったのだと思う。リーティアの目が見えなくなり、僕自身も足取りが覚束なくなっていて、本当に死んでしまふと思っていた。貴族の屋敷の前にいるなどは知らなかった。今では大切に思うサーシャ様やモルテナ様でさえも、僕にしてみれば敵でしかなくて、屋敷の中で治療を受けていることすらも信じられなかった。僕たちを養子にと、お二人が望んでくださるまでは僕だけがそれを断り、リーティアが養女となって以降も、夫妻は僕も養子にと事あるごとに望み、僕がそれを断るといつのがこの十年ずっと続いている。

重い雰囲気の中で、それを裂くかのように能天気な声がした。

「ならば、オルソン卿夫妻はルーテシアを養子にと、今だ望んでいるということだな？」

声の主は、ふむ。と一人納得した様子で僕に言った。

「ルーテシア。今すぐオルソン卿の養子に入れ。」

…なんですか？

第五話（後書き）

作者は重い雰囲気苦手です。いや、好む人はいないとは思いますが…。重い雰囲気ブレイカーとかあったらいいな。

第六話

その男は、深い蒼の瞳を向けた。その奥に、激情の光を湛えて。

「…なんでしようか。ユリアス殿下。」

「ユリアスだ。」

「ええ、ですからユリアス殿下とお呼びしています。」

ユリアス殿下は眉間の皺を寄せる。人一人くらい殺してきたような、凶悪な顔つきである。僕も同様に眉間に皺を寄せる。どうせ効果などありはしないだろうが。

「…なぜ養子に入らない。」

案の定効果はなく、ユリアス殿下は先ほどから同じ質問を繰り返す。

「ルーテシア。今すぐオルソン卿の養子に入れ。」

「嫌です。」

名案だろう！と言うような目のユリアス殿下に、僕は間髪いれず答える。

「…なんで。」

「さっきの話、聞いてました？」

「…ああ。」

僕は貴族になるつもりはない。リーティアの傍に、一番傍にいられる形を選択したいんだ。

と、告げたはずだ。だというのに。

「ルーテシア。何がそんなに嫌なんだ。」

この男、ユリアス殿下は何もわかつちやいない。

あの後、なし崩し的に話は終了し、僕もいつもの仕事に戻っている。今は、庭の掃除。

「。」「

「ルーテシア？」

深い蒼の瞳が覗き込む。この野郎！とは口には出さないけれど、僕は持っていた筈で土埃をユリアス殿下にかける。

「！うわっ！！っぐ、げほ、な、何をする！」

咳き込むユリアス殿下から目を逸らし、目線を下ろす。

「…リーは、僕が守らなきゃいけないんだ。」

「何故だ。」

はっと顔を上げれば、真剣なユリアス殿下の顔があつた。僕は無意識に呟いていたらしい。

「…別に。妹だから、当り前です。」

「それだけとは、到底思えんがな。」

「！」

ユリアス殿下は笑わない。ただ、その瞳の光は僕を優しく包む様で、心から慈しまれているように感じてしまった。

だからなのだろうか。僕は、いつ間にかユリアス殿下に心の内を開けてしまっていた。

「…リーティアは、親の顔を覚えていません。僕も、ぼんやりとしかわかりません。」

ユリアス殿下は、頷くでも、何か口を挿むでもなく、ただ静かに僕に寄り添って聞いてくれていた。

「母は、リーティアを生んですぐに、死んでしまったと記憶しています。変な言い方ですが、その、自分のことのように感じていないんです。リーが生まれたのは、僕が2歳の時ですから。…父は、酷い人でした。顔は覚えていません。でも、言葉が強く残っています。僕たちを、呪う言葉でした。」

ユリアス殿下の体が一瞬震えたように思ったが、それを気にしていられるほど僕は冷静ではなかった。吐き出したかった。きつと、心は限界だったんだろう。

「僕たちは、生きていてはいけないのだと、そう言われ続けていま

した。生まれてこなければとも。命を諦めることは、いつだって出来た。リーティアも、それは理解しているようでした。でも、それをしなかった。僕は、死んだ方がいいのかと問うリーに、いつも生きろと言いつけて…。」

蒼の光が、優しく見守っている。それを感じるだけで、心が溢れそうになる。今にも、泣きだしそうなくらいに。

「母がね、言っただけです。ルーテシアは姉さんだから、妹を守ってあげなきゃねって。お願いねって。そのまま死んでいった母を見て、自分しかリーを守れないと悟りました。父も、やっぱり守ってなどくれませんでしたし…。僕たちは捨てられたことになってるけど、本当は違う。僕たちは、父から逃げたんです。生きるために。同じ死ぬなら足掻きたかった。あのままじゃ、いつか殺される。殺されてなかったことの方がおかしいほどの生活。だったら、二人で逃げて、二人で死のうと決めただけです。まあ、結果こういう風になるのだから、その選択は間違っていなかったんですけどね。」

自嘲するように笑むと、ユリアス殿下の瞳が揺れた。そして気付いた時には、僕はユリアス殿下の腕の中にいた。

「え…あの、ユ、ユリアス殿下…。」

「いい。何も言わない。」

「でも…。」

「もう、いいんだ。大丈夫なんだ、ルーテシア。大丈夫だから…。」
苦しそうな声。何故、貴方が苦しんでいるんですか？

僕が身を振ると、さらにきつく抱きしめられた。どうして？わからない。わからないよ…。自然と、涙が流れた。嗚咽が出るわけではなく、静かに流れた。頬を伝い、やがてユリアス殿下の肩を濡らした。…この温かい気持ちは、何？

「…愛している。」

絞り出すようにユリアス殿下が耳元で囁く。何度も、何度も。

「愛しているんだ、ルーテシア。」

僕の涙は、止まらない。

第六話（後書き）

やりおった。やりおったでユリアス君。

耐えることって必ずしも美ではない。解き放たれることも、時には重要なんだ。

幕間一 ユリアス

「…というわけで、俺一目惚れしてしまったんですよ！」

というわけで、の前はほとんど聞いてない。右から入って左へ抜ける。まさにそんな感じ。

一目惚れ。つまり、見た瞬間に惚れること。それを俺は、ずばり信じていない。だって一目で何がわかると言っただ。そうだろう？

「ちょっと、聞いてるんですか!？」

「…んー、ああ。」

忘れていた。まだ話を聞かねばなんのか。

「で？誰に。」

「つな!…聞いてなかったんですね。まあ、いいですけど。リーティア・オルソン嬢ですよ。」

「オルソン？」

オルソンと言えば、名高き名家だ。それに、気の進まぬ見合いの相手にその名があった気がする。

「そうなんです!リーティア嬢は、本当に花のように愛くるしいお方でした!。」

うつとりしている相手は、底抜けに間抜けな顔をしている。…花、ね。

それから数日の後、悪友のモーリスに連れられて、俺はオルソン邸へと足を踏み入れた。

「…帰りたい。」

「出来ん。」

俺の希望は一刀両断された。モーリスが屋敷の玄関で挨拶をしている間は暇なので、なんとなく整えられた庭へ目を向ける。すると、

ふわふわ飛ぶ綿毛を見た。

「…？」

いつもならそんなに気に留めたりしないのだが、何故かそこへ足が動いた。

近づくと、かすかに声が聞こえた。女の声だ。

「うわぁ！止めるよ、リー！」

「ルーったら綿毛だらけ！」

「リーのせいじゃないか！」

かなり近くにいたのだろう。いつの間にか垣根を超えていた。その音に、そこにいた二人は慌てて振り向く。…俺は目を疑った。

「どちらさまでしょうか。」

そういったのは確かに執事服の男…のようだった。しかし、男には見えない。女？

「あ、あの…。」

…俺は、勘には自信があるつもりだ。こいつは、女だと本能が告げている。すまない、と口は勝手に答えているが、意識は別の場所にあった。

それを遮るのは、その後ろにいた貴族の娘。もしや、この娘がオルソンの…。確かに、花のようと形容されてもおかしくない容姿だ。しかしこの二人、よく似ている。

思考はオルソン卿により強制終了した。ほっと胸を撫で下ろしているこの執事服の女を、そっと視界に入れる。綺麗な金の髪に、小さな綿毛がついているのを見つけて、気が付けばその髪に触れていた。

「！？」

驚き目を丸くしている女。鈴が、なるような気がした。

「綿毛だ。」

礼を言うそいつを見つめると、欲しいと、唐突にそして確実に思

った。

オルソンの娘との見合いの話もそこに部屋を出れば、柱の隅にいるあいつを見つけた。ルー、と呼ばれていたか。

ルーは俺を見て、あからさまに肩を落とした。…むかつく。

「俺ではだめなのか。」

「うえ？」

可愛い。俺を見上げるその瞳も、小首を傾げるその仕草も。

何故かはわからないが、ルーは自分が女だというのを隠しているようだった。女だと認めさせたい。そんないじめっ子みたいな心で迫る。

困った顔もいいな。なんて思っていたら、

「ちよつと！私のルーテシアに触らないで！」

と聞こえた。突き飛ばされたりもしたが、つまりは女であると認めさせたというわけだ。

見れば見るほど欲しい。愛しくて堪らない。隣のルーテシアは居心地悪そうに縮こまっていて、それがまた抱きしめたくなるほどに可愛かった。

オルソンの娘のリーティアはなんだかんだと騒いでいたが、モリスの発言で気になっていたことを聞くことが出来た。

何故、妹のリーティアだけが養子に入ったのか。ルーテシアが貴族の養子に入っていれば、俺は簡単にルーテシアを手に入れられるというのに…。

今、ルーテシアが腕の中にいる。静かに、泣いている。

ルーテシアの話は、部屋で聞いたものよりもずっと凄惨だった。あくまで淡々と述べるルーテシアが憎かった。何故、耐えるんだ。何故、泣かないんだ。

妹を頼むなどと言ったルーテシアの母が憎い。ルーテシアに苦しい選択をさせたルーテシアの父が憎い。

自嘲するように笑ったルーテシアを見て、抱き締めずにはいられなかった。もういいんだと、耐えるなど、伝えたかった。

「え…あの、ユ、ユリアス殿…。」

「いい。何も言うな。」

笑うな。泣け。泣いてくれ。

「でも…。」

「もう、いいんだ。大丈夫なんだ、ルーテシア。大丈夫だから…。」
俺に何が出来る。ルーテシアに、俺なんかが何を出るといいうんだ。それでも、俺はルーテシアを逃すことなんか出来なかった。

肩が、濡れている。泣いているのか？…そうか。君は、泣いてくれたのか。

嬉しくて、嬉しくて、俺は絞る様に愛を語った。
きつく抱き締めた彼女に、どうか伝わりますようにと。

幕間一 ユリアス（後書き）

傷ついた人に何が出来るわけではないけど、傍にいたりとき。何と言葉をかければ分からなくても、自然と抱きしめていたりしているものです。言葉より行動が、温かさをもたらしてくれることがあるのかもしれないね。

第七話

僕は、その腕の中でひとしきり泣いた。その間、絶えず耳に届く『愛している』という言葉が、全身に沁みわたる様に感じた。

「あの、ユリアス殿下。…僕、もう大丈夫ですから。」

離してくださいとユリアス殿下の胸を押すと、密着していた体にほんの少し隙間が出来た。でも、彼の腕は僕の腰辺りから離されることはなく、結局は逃げられなかった。

「…ルーテシア。」

ユリアス殿下を見上げると、彼は酷く悲しそうな顔をしていた。僕の胸が、軋んだように痛んだ。

「どうしたのですか？」

やはり、話すべきではなかったのだろうか。

「ん、赤くなつてしまったな…。」

何が？と聞く前に、ユリアス殿下が僕の目の周りにキスをする。

「うつわ！な、なにを…！」

一生懸命顔を背けても、お構いなしにその唇は追ってくる。

「ちょ、ちよつと…っん、やあ…！」

何が何だかわからない。僕はパニック状態だ。うう、泣きそうだ

…。目が潤む気がする。

「…ひゃっ！」

舐められた！何故舐める！？

「あー、次は顔が真っ赤だ。じゃあキスして治さないとな。」

「い、いりませんっ！」

治るわけがないでしょうが！にやにやと笑うユリアス殿下は、まるで子供。さっきの悲しげな表情が嘘のようだ。

渾身の力でユリアス殿下を突き飛ばすと、僕は逃げるように屋敷へ戻った。

「舞踏会、ですか。」

「ああ、今度大きな舞踏会がお城であつてね。それにリーティアを招待したいと、モーリス殿が仰つてくださったんだ。」

客間に戻ると、モルテニア様がご機嫌な様子で僕に言った。

モルテニア様はリーへの招待が嬉しいようだった。モーリス様は僕を見て、にこりと笑った。

「…僕は、リーを行かせたくありません。でも、これはリーが決めることですから。」

この台詞は、こういう招待状が届くたびに吐く台詞だ。あくまでリーの意思を尊重する。でも、リーがこういった類の招待を了承することが滅多にないのも知っている。

「私、その舞踏会行きますわ。」

「リー!？」

いつの間に部屋に入ってきていたのだろう。リーは驚く僕たちを見て、笑っていた。

「ルーも行きましょう?」

「え?う、うん。」

それはもちろんのことだ。リーから離れるなんて出来ない。まして舞踏会なんだし、どんな男がリーに近づくかもわからない。

「じゃあ、決まりね!」

なんだろう。リーはいつものように笑っているけど、なんか違うような気もする。何か、企んでいるような…。

その直感が間違っていないかったことを僕が知るのは、まだ少し先のことになる。

舞踏会への出席が決まり、お城へ向かう準備が急ピッチで行われた。ドレス、装飾品はもちろんのこと、ティーセットにぬいぐるみまで。あれよあれよという間に、荷物がとてつもなく多くなった。

「リー…。」

「なあに？」

「こんなにいるの？」

「ええ。」

リーの笑顔には、逆らえません。

準備が済み、馬車の用意をしていると、ユリアス殿下が歩いてきた。僕の傍まで来ると、何やら恐ろしい顔で詰め寄られた。彼には僕の目の周りを舐める、というわけのわからない前科があるので、若干警戒。

「…ルーテシア。舞踏会へ出席するのは本当か。」

ああ、そのことですか。

「はい。まあ、実際に出席するのはリーですけどね。」

「…お前は？」

「え、僕はいつも通り執事としてリーの傍にいますくらいですよ。」
ユリアス殿下の顔を一瞬緩んだかと思えば、次には眉間に皺が寄った。よく表情の変わる人だ。

「…そうか。ちゃんと、男として振舞えよ？」

「は、はい。」

そんな当たり前のことを言われても…。

「では、お先に失礼いたします。城で、お待ちしていますね。」

モリス様とモルテニア様が丁寧に挨拶を交わし、ユリアス殿下を乗せた馬車は僕たちより一足先に城へ出発した。というより、城へ帰った。

城へ向かう馬車の中で、リーは終始ご機嫌だった。楽しみだわ、とか面白くなりそう、とかぶつぶつ言っている。舞踏会へ行くのに、こんなに機嫌のいいのは初めてではないだろうか。

それがなんだか新鮮で、リーがあらさまに何か企む笑顔を見せ
ても、僕は追及しなかった。僕はこの後、それを激しく後悔するこ
とになる。

第七話（後書き）

ユリアス君がませたガキ大将に見えてしまいました。
ユリアス君、あとで職員室に来るように。

第八話

なんで！？どうしてこんなことに！？

「もう！ルーったら、往生際が悪いわよ？」

リーが、リーが怖いよお…。

郊外にあるオルソン邸から王都の城まで、馬車に揺られること数時間。初めて訪れたそこは、本当にお伽噺の中にいるように感じるほど美しかった。

「綺麗ね、ルー。」

「うん、なんか緊張するよ。」

貴族の娘と、一介の執事が二人して城を見上げる光景は、さぞ滑稽に見えることだろう。どこの田舎者かしら、なんて言う声もかすかに聞こえる。オルソンの一人娘と判れば、掌返したように媚売るくせに。

「…さて、と。行きましようか、お嬢様。」

「嫌。」

「は？」

リーは口を尖らせて拗ねている。

「…お嬢様、止めてよ。」

そのことか。

「無理ですね。」

「な！？」

「僕はただの執事ではありません。そうでしょう？」

リーはむくれた顔をしたが、渋々了承した。

リーに用意された部屋は、派手ではないが大きくて綺麗な部屋だ

った。大きな窓からは、お城ならではの絢爛な庭が一望できた。

「ねえ、ルー。機会があつたら、私このお庭を散歩してみたいわ。」

「いいですね。でもとても広いですから、一日で回れるでしょうか。」

「。」

「そうねえ。ちょっと無理かしら？」

「庭ならいつでも見に来ればいい。」

僕とリーの会話に、今までいなかったはずの男の声が混ざる。振り向けば、そこにユリアス殿下が立っていた。

「ユ、リアス殿下。」

「ん。」

「何故ここに。」

至極当たり前の疑問を投げかけたはずなのに、逆になんでそんなことを聞く？という顔をされた。

「しつこいですわよ、殿下。」

リーが不機嫌な顔で詰め寄る。そんなリーなど気にした様子なく、ユリアス殿下は

「しつこいくらいが丁度いいんだ。」

なんて意味不明な言葉を発した。リーはまあ、いいわ。と話を続ける。

「で、何かお話があつてここにいらっしゃったんではないのですか？」

ユリアス殿下は、思い出した！と顔にして、リーに、いやリー・テ・イア・オルソンに告げる。

「舞踏会への出席、誠に嬉しく存じます。舞踏会の開始は今宵の7時。王家の者もこぞって参加いたしますので、どうぞよろしくお願ひいたします。……と言えと言われてきた。」

棒読みの上、最後のは絶対いらない。

「……確かに、了解いたしました。」

リーも棒読みだった。そして、二人は何も言わず睨み合っている。
「仲、いいなあ……。」

「「違う！！！！」」

ぼそつと聞こえないように言ったはずなのに、二人にはばつちり聞こえたらしく、声を揃えて否定した。仲いいじゃないか。

僕が微笑ましく思っている間も、二人はなんだかんだと仲よく喧嘩していた。それはユリアス殿下の従者がやってきて、そのままユリアス殿下が引きずられて帰るまで続き、リーは一人勝ち誇ったように笑っていた。

そしてふと思う。僕も、あんな風にユリアス殿下と仲よく出来たら…。なんとなく、胸が痛む気がした。

「さて、舞踏会まであと2時間もないわ。準備を始めましょう。」

リーの合図により、メイドたちが一斉に準備を始める。

「ルー様、ドレスはどれにいたしますか？」

そうして尋ねるのは、メイドの二ナ。僕たち二人の友人でもある癖のある栗毛に小柄な体躯。小動物を見ている気分になるような、愛らしい容姿をしている。

「んー、そうだなあ。これはどうだろう。」

僕が示したのは、淡いピンクの可愛いものだった。花をモチーフに、レースやフリルをふんだんに使っており、リーティアの魅力を十分に引き出すだろう。

「では、髪は高く結いましょう。」

「うん、頼むよ。」

ドレスを決めるのはいつも僕だけど、そのほかのことはすべて二ナが一任している。二ナに任せれば間違いがない。これは、僕とリーの共通見解である。

てきぱきと流れるようにリーの準備が進む。元々可愛いリーが、どんどん綺麗になっていく。

「どう？」

全ての準備を終え、リーは僕の前で回ってみせる。ドレスがふわ

つと舞って、とても可愛い。

「凄く綺麗だ、リーティア。」

僕が満足気に笑うと、リーが悪い笑みを浮かべた。

「じゃあ、次はルーの番ね！」

「はい！？」

リーは、よく理解出来ていない僕、いや理解したくない僕を尻目に、ドレスを引っ張り出す。

「ま、まさか…。」

「私、ルーにはこの上品な紫が似合うと思うの！！」

リーが取りだしたのは、確かに上品な紫であったが、片方にしか袖が付いていないもの。つまり、どう足掻いてももう片方は肩が丸見えだと言うこと。

「い、嫌だ！！！」

全力で逃げる。いや、逃げようとした。僕はしっかりと二ナに捕まっていた。二ナもまた、リーと同じ悪い笑みを浮かべていた。

そして、冒頭に至るわけである。

第八話（後書き）

ドレスの仕組みがわかりません。レースとかフリルとか、なんか知ってる用語を並べてみました。もっと詳しく書けたらよかったのですが、どうも上手くいきませんね。

第九話

「二ナって力持ちだったんだね。」

「この間、重量挙げの大会で優勝しましたわ！」

内容が内容だが、にこにこと自慢げに話す二ナは、やっぱり可愛らしかった。小柄で小動物のようだと思っていた彼女は、とんでもない怪力少女だった。今までもその片鱗は見てきたと思うが、これほどとは考えも及ばなかった。

僕は、抵抗らしい抵抗が出来ないままに二ナによって着飾られた。リーもまた、こっちの飾りがいいだの、もう少し色を足してだの、楽しそうに口を挿んでいた。

そしてあつという間に、僕は紫のドレスに身を包み、短めの髪は巻かれ、そこに花が飾られていた。

「綺麗！凄く綺麗だわ、ルー！」

リーは絶賛するけど、僕はドレスに着られているとしか思えない。

「うう…こんなの嫌だあ…」

「往生際が悪いですわ、ルー様あ。」

二ナもまた、完璧な仕上がりです！と叫んでいた。そして僕は、気になっていたことを聞く。予想が外れていることを信じて。

「ねえ、なんで僕にこんな格好させたの？」

「それは、ねえ？」

「そうですわよ、ねえ？」

リーと二ナが意地悪そうに顔を見合わせ笑う。そして声を揃えて言った。

「「舞踏会に出るためですわ！」」

…ああ、予想よ、何故外れてくれなかった。

時刻は間もなく午後7時。会場である大ホールには、多くの貴族が集まっている。執事服に着替えることを結局許されなかった僕は、紫のドレスのまま大ホールへ足を踏み入れた。僕はリーの後ろをついて回るだけなので、注目されることはないと思うが、どうも居た堪れない気持ちになる。今すぐ、みすばらしくてすみませんっ！と平謝りして出て行きたいくらいだ。

「リーティア嬢！いらしてたんですね！」

む。リーティアに近づいてきたのは、ディムラント家の三男坊だった気がする。年は僕とそんなに変わらないと思う。だが、愛想笑いの奥に潜む好色な瞳が気に入らなかった。いつだったかも、嫌がるリーティアにしつこく言い寄っていた記憶がある。

「お久しぶりですね、セデレイ様。」

リーティアも愛想のいい笑みを浮かべたが、その声には嫌悪の色が混じる。それに気がつかないのか、セデレイ・ディムラントはさらにリーティアに近づく。

「セディと呼んでくださいと、言っただけですが？」

好色の瞳はその色をさらに濃くする。

「殿方をそんな風にはお呼びできませんわ。」

「まったく、つれないお人だ。いつか、呼んでもらえる日が来るのを待ちわびていますよ。」

「まあ、そんな待たれずともいいのですよ？一生ありませんもの。」
「やんわりとした口調だったが、かなりきつい拒絶にディムラントの三男坊は怒りを覚えたようだ。それがリーに降りかかる前に、僕はさりげなくリーの前へと体を入れる。」

「君は……」

「もうすぐ舞踏会の開始時間です。こんなくだらないことをしていてもいいのですか？ディムラントの名に傷が付きますよ。」

僕はにこりと笑うと、リーをつれてその場を離れた。なんとなく視線を感じたが、リーを連れ去る僕を睨む目だろうから、気にしないことにする。

大ホールがある程度見渡せる位置に、リーと二人並ぶ。リーを見る人たちの視線は、舞踏会開始の音楽が始まるとともに消えた。

音楽に合わせ、絶妙のタイミングで王族たちが、紹介されながら入場してくる。こんな時でなくては、目通ることすら許されぬ、高貴な人たち。国王、グレスオルト・クライア陛下。王妃、オルテモンド・クライア妃。第一王子、アリオズ・クライア殿下。そこまで紹介されてふと気付く。そういえば、と。

「第二王子、ユリアス・クライア殿下。」

ああ、あの人も王子だったな、と。

「ルー、見てるわ。」

「ああ、見てるね。」

荘厳な雰囲気の中、国王より挨拶があった。そしてその挨拶中、ユリアス殿下が射るようにこっちを凝視しているのだ。

なんとなくだが、怒っている気がする…。何で？

国王の挨拶は、意外と手短に終わり、貴族たちはそれぞれ談笑なりダンスなりを楽しんでいる。リーと僕はと言えば、貴族の坊っちゃん方に囲まれて身動きが取れなくなっていた。

「リーティア嬢、今日は一段とお美しい。それに、そちらのお方もとても綺麗だ。」

「初めてみるお方かと存じますが、お名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「リーティア嬢、是非紹介していただきたい。」

リーと話をする口実にされている。それが僕の感想だった。綺麗だ、可憐だ、と言われてもそれらは酷く浅いものに感じた。むしろ、そのお世辞を使ってリーに近づこうとする性根が気に入らない。

リーもかなり苛々している様子で、返事も気のないものになっている。いい加減辟易しているのが見てわかる。

はぁ、と小さくため息をつく、と、一人の男が僕の手を取った。う、気持ち悪い！全身に鳥肌が立つような、ぞわぞわした感覚に襲われる。けれど、次の瞬間にはその手は勢いよく離された。

「？」

前の男を見ると、怯えているようだった。そして僕とリーを囲んでいた他の男も。彼らは一様に、僕の後方を見ていた。ゆっくり振り向くと、そこにいたのは明らかな怒りを纏ったユリアス殿下であった。

だから、なんでさっきから怒っているの？

第九話（後書き）

ルーテシアさんは実はかなりの美少女です。

第十話

「ユ、ユリアス…殿下。」

男たちが、恐怖に引き攣った顔でその名を呼ぶ。その視線の先にあるのは、たった今名を口にした、ユリアス・クライアその人。彼は蒼い瞳を瞬かせる。

「…失せる。」

低く響いたその声は、彼らを直接攻撃し、有無を言わさぬ強さがあつた。抗えようのない迫力に、彼らは力なく逃げ去る。

それらの姿が消えるのを見届けると、次は周りを睨む。先ほどの男たちの中にはなりたくない、こちらを見ていた者たちは一斉に目を逸らし、話に花を咲かせた。

「…えーっと。ユリアス殿下？」

そして今、彼の人々の瞳は僕を睨んでいた。忌々しいとも言つたように。

「…来い。」

「へ！？うわっ！いたたた！ちよ、ちよっと！」

「うるさい。」

な、何？僕、なにかしましたか…？

ユリアス殿下に強制連行された先は、夕刻にリーと話していたあの立派な庭だった。ユリアス殿下は垣根をかきわけて、どんどん奥へ進む。僕の腕を掴む手が強くて、なんだか痺れるようだった。

「…っうわ！」

随分奥に来て、やっと僕は解放された。と言っても、解放された

のはさつきまで掴まれていた腕だけで、僕の体は垣根とユリアス殿下によって包囲されている。

「…あ、の。ユリア…。」

「なんでだ。」

僕の発言を遮断し、ユリアス殿下が目僕を捉える。不謹慎にも、なんて美しいんだろう。などと思ってしまった。

けれど、確かに彼は美しい。月光に照らされ光る銀髪は僕の視覚を侵し、激情の瞳は震えるほどに胸を高鳴らせた。

ユリアス殿下はそんな僕に気付く様子もなく、じっと僕を捉えたまま同じことを繰り返し返す。

「なんでだ。」

「え…？何が、でしょうか…。」

怒っている理由がわかりません。はい、全く。

「なんで、そんな格好をしている。」

「うえ？えつと、リーと二ナに強引に着せられました。」

「…リーティアの仕業か。」

小さくではあったが、確かにチツという舌打ちが聞こえた。あー、そんなに見たくなかったのか。

「あのー、えと、すみません。」

「なんでお前が謝る。」

「え？だって似合わないと思ってるから怒っていらっしゃるのじゃない？」

「は？」

え、違うんですか？

ユリアス殿下は、深いため息をついて首をもたげる。

「正直…驚いた。」

「あー、似合わないすぎてですね。僕もそう思います。」

「違う！似合いますぎて！」

僕は耳を疑った。この人はなんておかしいことを言うのだろうか。目を丸くしてユリアス殿下を見ると、その顔は月明かりの下でさえ

もよくわかるほどに赤くなっていた。

「…凄く、その、可愛い。」

「!？」

僕の体が、一気に沸騰したみたいに熱くなった。あれほど綺麗だ、可憐だと言われたってなんともなかったのに。

「う、あ…うう…。」

「どうした？」

ユリアス殿下はその蒼の瞳で僕を覗き込む。そして不敵に笑った。自分でもどうしようもないくらいに動揺している。こ、これ以上見つめられたら爆発する！本気でそう思うほどに。

「…ルーテシア。」

甘く囁かれては、体が硬直する。逃げ出したいくらいなのに、動けない。泳いだ視線に入りこむユリアス殿下の瞳は、静かに深く揺れていて、強い光は男のそれを感じさせた。

「ユリアス殿…んっ！む…う。」

今度は目ではない。あの日感じた柔らかい熱は、今僕の唇を奪っている。

なんで、どうして？そう思っのに、熱くなる体はさらにその温度を上げていく。

第十話（後書き）

強引に唇奪っちゃうとか、王道中の王道ですよ。でも現実問題
それやっちゃいかんよ、ユリアス君。

幕間二 ユリアス

愛しいと、心から思う。

「んう…ふっ、んっ！」

薄く瞼を開くと、これでもかと瞼をきつく閉じたルーテシアが見える。恐らく、これが初めてのキスなのだろう。そう、このルーテシアという娘は穢れを知らぬ、まっさらな生娘なのだ。

それと思うだけでぞくぞくと血が昂ぶるのがわかる。俺のものだ。俺にだけ、穢されていればいい。そんな独占欲。

女であることを隠し生きた10年を、今だけは褒めてやりたい気分だ。

舞踏会など、退屈であるか、媚売るやつらで疲れるかのどちらかだ。楽しんだことなど一度もない。いつもならば早々に立ち去るが、今日はそうもいかなかった。

目に入っただのは、紫のドレスに身を包んだ美しい女。それは間違いない、ルーテシアだった。

細く、触れば鈴の鳴るような気持ちになる金の髪は軽く巻かれ、それを彩る飾りは見事にルーテシアを引き立たせている。普通に見るのなら、これほど嬉しいことはない。だが、ここは舞踏会の会場。どこで誰が狙うかわからない。それに、何故右肩が出ている！あれではルーテシアの白い肌が丸見えじゃないか！

父である国王の話など耳にする余裕もなく、俺はルーテシアを睨み続けた。

「…失せろ。」

特に今ルーテシアの手を握った奴。

男共を追い払い、野次馬根性でこちらを見ていたやつらも黙らせた。そしてルーテシアはこちらを見て、きょとんとした表情をしている。…忌々しい。そしてそんな顔も可愛いなどと思っている俺自身も忌々しい。

「…来い。」

腕を掴んでいる辺り、強制連行なのだが。

「へ！？うわっ！いたたた！ちょ、ちょっと！」

「うるさい。」

向かったのは勝手知ったる城の庭。垣根にルーテシアを追い込む。逃がす気など、毛頭ない。

「なんでだ。」

何度が繰り返したそれに、ルーテシアは困ったように答える。

「うえ？えっと、リーと二ナに強引に着せられました。」

「…リーティアの仕業か。」

あの女、何を考えている。そう思うと、自然に舌打ちをしていた。すると、ルーテシアがいきなり謝りだし、拳句の果てには似合わないから怒っているのだらうと見当はずれなことを言いだした。

正直に言おう。

「…凄く、その、可愛い。」

紫のドレスは上品かつ可愛らしくルーテシアを見せた。開いた右肩は、きめ細かいルーテシアの肌をあまりにも魅力的に映した。そこから覗く、形のいい鎖骨などは、今すぐにむしゃぶりつきたい衝動を駆り立てる。

目の毒。そう形容するしかないだろう。だって今現在、俺は理性と本能の狭間で揺れている。

「う、あ…うう…。」

動揺しているルーテシアを覗き込み、どうした？と声をかければ、

面白いほどに顔を赤くした。

名を囁くだけで、ルーテシアの体が硬直する様は、とてつもなく心を加速させる。

可愛い。愛しい。最終的に俺は、こんなに可愛いルーテシアが悪いのだと結論付けて、その愛しい彼女の唇に己のそれを重ねていた。

「…ふっ…うん。」

漏れる吐息と、甘い声が耳を浸食する。重ねただけだったそれは、いつの間にかルーテシアを深く求め、俺の舌は今ルーテシアの口内を蹂躪している。全身の気が、そこに集中しているかのように熱い。どれだけの時間が経っただろう。欲望は乾くことなく溢れていたが、ルーテシアのほうは限界らしく、拳で俺の胸を叩いていた。

蹂躪していたものを解放すると、はう…。と恐ろしく色気のある声を出した。

「…~~~~っ！！！」

声にならない声でルーテシアは怒りだしたが、それも束の間、すぐに俺の胸へと飛び込んでくる。

「え…？」

「ん、腰が抜けたか。」

ルーテシアの顔は赤くなったり青くなったりと、なんだか忙しそうだ。

「…離してください。」

「却下。」

俺は垣根の傍で、ルーテシアを膝に座っている。さっきからずっと、離せ。嫌だ。の押し問答だ。

「何故…ですか。」

「ん？」

すると、ルーテシアが別のことを言い始めた。小さく呟くような

声を、一言一句逃さぬように耳を澄ませる。

「何故、こんなことするんですか。」

「ルーテシアが好きだから。」

「僕は、リーのように女らしくありませんよ。」

「そう？俺は十分女らしいと思うけど。」

「僕、男として生きていたいんです。」

「別にいいよ。俺を愛してくれれば。」

「……どうして、そんなに僕にこだわるんですか。」

「愛してるから。」

「……」

ルーテシアはそこで黙ってしまった。俯いてしまつて表情がわからない。でも、本心なんだ。心からそう言える。わかつてるのか？ルーテシア。

そう言えば、初めてみたときからこんな風に感じていたんだった。欲しかったり、抱きしめたかったり。

信じてなんかいなかったけど、これをそう言わずしてどう言えばいいんだろう。俺は一息置いてそつと囁く。俺に出来る限りの優しい声で。

「……一目惚れなんだ。」

だからもつと、君を教えて。

幕間二 ユリアス（後書き）

外側だけじゃなく内側も。全部を知りたい。誰より知りたいから恋なんだ。

幕間三 リーティア

ルーが、泣いた。

「…ね、ルー。なんにも見えないよお。」

「リー、私はここにいるから。」

大丈夫。優しいルーの声。私の、大切な姉さん。その手を取って、小さな私は泣きじゃくるしかなかった。暗闇は、心を抉るようだった。

父の顔も、母の顔も知らない。知る必要もない。今、私の両親はオルソン夫妻。それが全てで、それ以外は知らない。

捨て子。それは嘘。私は、ルーに連れられ逃げた。ルーさえいればよかったの。目が見えなくなつて、暗闇が世界を支配しても、ルーの手のぬくもりだけで生きていられた。だから、私一人が養子に入ることも、ルーが執事として女であることを隠して生きることとかまわなかった。それが、ルーとずっと一緒にいられる条件なら喜んで応じた。

だから、ルーの心なんて知ろうとしなかった。私は、今でも小さなリー。ちっぽけな、リーティア…。

「ルーテシア。今すぐオルソン卿の養子に入れ。」

男は言った。ルーを、手に入れるために。

ユリアス・クライア。この国の第二王子。この男が、ルーを欲している。渡したくない。だって、ルーがいなくなるなんて考えたくもなかった。

けれど、それは間違いなのだと私は痛感することになる。

「……リーは、僕が守らなきゃいけないんだ。」

その言葉から始まった、ルーの記憶。それは、私の浅はかさを知らしめた。父も、母も、憎かった。実の両親なのに、憎かった。そして、自分自身も。ルー、ごめん。私、こんなにちつぽけでごめん……。

私は、隠れていた場所から動くことが出来なかった。立ち去ることも出来なかった。ユリアスとルーの話に、私はただ嗚咽を我慢してしゃがみ込むしかなかった。私では、貴女に寄り添えない。だってそうでしょう？ 貴女がこんなに耐えてきたのは、私の為なんだから。

「もう、いいんだ。大丈夫なんだ、ルー。テシア。大丈夫だから……。」
彼は、耐えるなど、泣けと言っているようだった。私も、祈るしかなかった。大切な姉さんが、その奥にしまってしまった本音を吐き出してしまったことを。

私は見た。静かにルーが、泣くのを。愛していると囁く男の腕の中で、綺麗に泣いていた。

私は、ルーに自由になつてほしい。そう、心から願っていた。

舞踏会への参加を決めたのも、全てはルーを自由にするため。私を守りたい気持ちを上回る気持ちを手に入れてもらうため。

「二ナ。私、ルーを自由にしてあげたいの。」

親友の二ナにそう相談すると、二つ返事で協力すると言われた。そして二人で考えたのが、今回の舞踏会へルーを参加させること。もちろん、執事なんかじゃなく素敵な女の子して。

ルーに秘密なんて、そうそうなかったから何だか楽しくなっていた。ルーにどんなドレスを着せよう。きっと嫌な顔をするんだろうな。想像するだけで笑っちゃう。そして同時に、ルーに一目惚れし

たであろう王子の顔も。彼はどんな反応をするだろうか。驚く？怒る？照れる？…全部か。そう想像するのは簡単だった。

案の定、なんて言葉がぴったりの顔をして、ユリアスが睨んでいる。その視線の先は、間違いなくルーテシア。その瞳は微かに独占欲の光を秘めている。

確かに、私や二ナが想像していたよりも、ずっとルーは綺麗になった。紫のドレスは似合うどころか、ルーの為に作られたと言われたっておかしくなかった。

少し、失敗したかしら…。ものすごく綺麗になったルーを見ながら、ルーをルーとも気がつかない愚かな男共に相槌を打つ。紹介してくれだの、お二人とも美しいだの、聞き飽きてしまったわ。

そんな時、後ろからかなりの威圧感を感じた。私は、ほっと胸を撫で下ろした。向かってきたのは、ルーにかなり惚れこんでるユリアスだったから。癪だけど、これをどうにか出来るのは彼だけだもの。

ユリアスは短い言葉と目線だけで全てを終わらせた。ま、少しは役に立つじゃない。ユリアスを見ると、何故か軽口を叩きたくなるのはなんでかしら。

「…来い。」

「へ！？うわっ！いたたた！ちょ、ちよっと！」

「うるさい。」

不機嫌な様子で、ユリアスは強引にルーを連れ去ってしまった。せつかな。

でも困ったわ…。一人になってしまった。これでは誰に声をかけられても断れない…。ついて行ってしまおうかしら。でも、それは野暮よね。

ルーを自由にする。そう決めたものの、結局ルーがいなければ私

は駄目なのか。はあ……。とため息をつけば、先ほどの男共がまたこちらにやって来ようとするではないか。ユリアスの目的はルーなのだし、私がどうなるうと関係は確かにない。

「……どうしよう。」

「大丈夫ですか、お嬢さん。」

頭上から声がした。その方向へ顔を向けると、そこにはユリアスと同じ銀の髪が揺れていた。

「……ねえ、ルー。私も、自由になっていい？」

幕間三 リーティア（後書き）

フラグを立ててみる。

第十一話

「…一目惚れなんだ。」

彼は言う。恋をしているのだと言う。その綺麗な瞳に僕を映して、愛しいのだと彼は言う。

何故、僕なんだろう。

風の隙間に紛れて、舞踏会の喧騒が聞こえた。ああ、そうだ僕はリーと一緒に舞踏会へ来ていたんだ。そこでやっと、僕は重大な事実気付く。

「リーを置いてきちゃった！！！」

「何だ。そんなこと…。」

「そんなことじゃありません！！！」

僕はユリアス殿下から逃れ、走り出す。迷路のような庭を右往左往しながら、やっと会場へと辿りついた。

「…リー、どこだ。」

辺りを見渡すが、リーの姿がない。リーはいろんな意味で目立つから、いつもすぐに見つかるのに。すると、視界の端に銀が揺れた。

「…ユリアス殿下？」

いや、そんなはずは…。ユリアス殿下と同じ色の髪を持つその人は、バルコニーで何か話しているようだ。相手は壁に隠れて見えな

い。
まさか、と思いつつそっと近づく。気づかれないよう覗いてみると、彼の前にはよく知った姿があった。

「…リー！」

「え？」

僕に気付いたリーの目には、涙が溜まっていた。

「…どうした。」

「な、なんでもないのよ。」

リーは涙を拭う。僕はゆっくり近づいて、リーの頬を撫でる。

「…誰に、やられた。」

それにリーが答える前に、後ろから声がした。

「ああ、君がルーか。」

そうだ。誰に、なんてわかり切ってるじゃないか。僕は男を睨む。

「…リーに、なにをした。」

睨み続ける僕を、男は笑いながら見ている。そして、

「別に何も。」

「なっ…！」

男はその笑みを崩さない。僕など相手ではないと、言っているようだ。

「僕が来た時には、このお嬢さんはもう泣いていたよ。昔のことでも思い出していたのかな？」

男は笑んだまま、首を傾げる。銀髪がさらりと揺れるのが、嫌だった。

「貴様…。」

「本当よ、ルー。その方は、何も悪くはないわ。」

リーが毅然とした声をあげる。その目に涙はもうない。

「リー様の言う通りなのですわ。二ナも証言いたします。」

「二ナ…いたのか。」

リーの陰から出てきた二ナは、何故か楽しそうだった。

「ね？だから、言っただろう？」

その男も、何故か楽しそうにしていた。僕は全く楽しくないんだが。どうしてこの国の王子は、ことごとく性質が悪いんだ。

「兄上!？」

「おー、ユリアス来たか。」

そう、このいけすかない男は、ユリアス殿下の兄にして第一王子のアリオズ・クライア殿下。見た瞬間に分かった。さっき紹介されたこともあったが、兄弟だけあってユリアス殿下と似ているのだ。

「えっと、兄上は何故ここに？」

「ん？ああ、こちらのお嬢さんにちよつとばかり誤解されてしまつてね。」

アリオズ殿下は長い指を僕に向ける。

「ルーテシアが、何かしたんですか？」

「ルーテシア？ああ、この子の名前ね。んー、別に何もしてないんだけど、何もしてないのを咎められたというかね？」

ユリアス殿下の頭上にはてなが浮かぶのがわかる。それでは伝わらないだろう。そして、それを見越してそういう発言をするこのアリオズ殿下という人は、相当悪趣味だと思った。

「まあ、相手はこんなに美しいお嬢さんなのだし、よしとしようか。」

「そう言つて、アリオズ殿下が僕に触れようと手を伸ばす。払いのけてやるう！と決心したのも一瞬。僕の体は、アリオズ殿下の前から、ユリアス殿下の前へと移動していた。」

「…え？」

「いくら兄上でも、ルーテシアに触れるのは許せません。」

何言つてるんですか、この人。アリオズ殿下は、ふむ。と一つ頷く。

「お前がそんなに執着するなんて珍しいね。…あ、そうだ！」

アリオズ殿下は何かを思いついたらしい。そして、リーを見て言つた。

「お嬢さん、僕の別荘まで来ませんか？」

「え…何故でしょうか。」

「ふふ、何故だろうね？」

その笑顔は胡散臭さに満ち溢れていた。ろくな事にならない。リ

「ティア逃げて！」

「別荘だなんて、素敵ですわぁ。」
「二ナ、そこ賛同しないで…。」

第十一話（後書き）

新キャラってやつですかね。胡散臭さ100%な人物、結構好きです。

第十二話

アリオズ殿下を苦手だ。と認識した舞踏会から、今日で3日が経った。僕はいつものように、執事服で仕事をしている。舞踏会でのことは、出来ればなかったことにしたい。

「ルー。」

「うわっ！...っと、リー。どうしたの？」

いきなり後ろから声をかけられたかと思ったら、そこにいたのはリーティアだった。リーの表情は硬く、けれど強い意志を感じた。僕はリーの手を取り、そっと聞いた。

「リー、どうしたの？」

「...ルー。」

言いにくいのだろうか。リーは話すことを躊躇しているように見えた。

「...大丈夫。僕は、ちゃんと聞くよ。」

表情は硬かったが、リーが笑んだ気がした。そして、その重い口を開く。

「あのね、ルー。私、アリオズ殿下の別荘へ行こうと思うの。」
「は？」

別荘へ、行く？

「な、んで。」

「見極めによ。」

「え、何を？」

「私たちの未来を。」

リー、それよくわからない。

モルテニア様とサーシャ様にどういふことを聞くと、お二人も

また未来がどのと言っていた。未来、の意味はわからないがリーティアが別荘へ行くことは、お二人も了承済みのようだった。

「…むかつく。」

「ルー様、お顔が怖いですわぁ。」

「二ナ、君は楽しそうだね。」

今にわかりますわぁ。と心底楽しそうな声をして、二ナは別荘へ行く準備を始めた。何があつたにせよ、リーはアリオズ殿下の別荘へ行く。これは決定。そして、それに僕がついて行くことは、絶対だ。

「やぁ、来たね。ようこそ、僕の別荘へ。」

「ご招待ありがとうございますわ。」

リーの挨拶で、僕たちは中へと案内される。

張り切り過ぎの二ナのおかげで、普通よりも早く出発した僕たちは、大きな湖のほとりに佇む綺麗な屋敷に来ている。別荘なのか、これは。

「リーティア嬢には、こちらの部屋を用意させてもらった。ルーテシア嬢と、二ナ嬢はその両端をそれぞれ使ってくれ。」

あてがわれた部屋は、リーの部屋はもちろんのこと僕や二ナの部屋までかなり豪華なものだった。

「…あの。」

リーが恐々と声を出す。

「なんだい？」

「用意していただいたのに、申し訳ないとは思つのですが…その、三人で一部屋ではいけませんでしょうか。」

「確かにベッドは三人くらい悠々と寝れるし、困らないとは思うけどそれでいいの？」

アリオズ殿下の言葉に、リーはゆっくりとしっかり頷く。僕としても、それはかなり安心できるのでありがたい。

「…わかった。この部屋を君たち三人で使ってくれ。」

三人で使うことになった、元リーの部屋。二ナは、調理場を見てみたいのと言って出て行ってしまったので、今はリーと僕の二人荷物を片づけながら、それならばとリーに尋ねる。

「どうして三人で、って言ったの？」

「それは…。」

そのリーの言葉の続きは、ある乱入者によってかき消される。

「ルーテシア!!!!!!」

扉を壊すような勢いで乱入してきたのは、その乱入姿も美しいユリアス殿下。しかし、乙女の部屋に無断で入ってくるとは何事か。

「こらこら、女性の私室に勝手入っではいけないよ？ユリアス。」

そう言う貴方もすけどね、アリオズ殿下。

「…何しに来たんですか。」

アリオズ殿下の別荘なのだから、アリオズ殿下がいるのは当たり前のことだろう。しかし、何故貴方が居るのだ。睨んだ先の彼は、輝くほどの笑顔で言った。

「お前に、会いに来たんだ。」

「…何故。」

「会いたいから。」

これについても、何故。と言いたいのだが、恐らくこの押し問答が延々続くのだろうと予測して、はあ。とため息をつくに止めた。

「いやあ、ユリアスは僕が呼んだんだよ。」

「え？」

なんで。アリオズ殿下はあの胡散臭い笑顔で、何故かリーに近づく。そして事もあろうにその肩を抱くと、

「リーティア嬢と二人きりになりたかったんだ。」

などと恐ろしいことを口にした。困惑する僕を尻目に、アリオズ殿下はリーを連れて出て行ってしまった。去り際に、

「頑張つてね。」

と言が残して。

リーが危ない。傍に行かなきゃ。だというのに…。

「腕を、離してください。」

「嫌。」

なんなのでしょう。来て早々にリーと引き離され、拳句このユリアス殿下と二人きり…？

今回、僕の中でアリオズ殿下は苦手な人から嫌いな奴に格上げしました。

第十二話（後書き）

アリオズ君、悔りがたし。

第十三話

「……」

「何をむくれているんだ。」

貴方達兄弟のせいでしょうが。

リーが心配だ……。アリオズ殿下がリーに何するかわかったもんじやない。なのに、なにに何故僕はこのユリアス殿下の隣で、心を弾ませているのでしょうか。

いけないんだ。わかってる。僕は、こんな風になつてはいけない。女であることを辞めたんだ。ただのルーとして生きると決めたじゃないか。だから、これは違う。きつと、リーの元へ走りたくて焦っているんだ。そうだ、そうに違いない。

「離してください、ユリアス殿下。」

「俺は、お前がなんであろうとかまわない。女だろうが男だろうが関係ない。」

ユリアス殿下の掴む力が、一層強くなる。痛いのに、苦しい。苦しいのに……嬉しい。

「ぼ、くは……」

止めて。お願い。僕は、僕のままでもいい。

「ルーテシア、俺はお前が好きだ。ルーテシア、お前は……」

「……っ！僕は！そんなの知らない！好きだと言われてもわからない！僕はリーの為に生きるんだから！」

聞きたくない！言うな！

「ル……！」

「離せ！」

どうやって抜き出たのかは知らない。僕を掴む手は、緩んでいた気がしたけど。僕はその手から逃れて、ただ何処行くあてもなく走

り続けた。

風が、水面をなぞる音がした。ああ、心地いい。鼓動も、熱い体も、この心も…全てを飲み込んで落としてくれるみたいだ。

「綺麗な湖…。」

切れていた息もいつの間にか落ちついていった。目の前に広がるのは、大きな湖。自然の中で、僕だけが違うもののように。湖へ数歩近付けば、それが水鏡となって僕を映した。

「…ひどい顔。」

そこに映ったのは、小さな小さなルーテシア。僕はあの頃と全く変わらない。

「卑怯な、ルーテシア。お前は、何故生きてるの？」

この場所で、この空間で、僕は僕という存在がいかに矮小かを刻み込む。

何故、生きてるの？

…リーの為。

本当に？

…もちろん。

嘘よ。

…何故？

だって貴女は私だもの。

…僕は、僕だ。

僕って、誰？

「僕は、ルーテシアだ！…ただの、ルーテシア。」

叫びが、湖を揺らし森に沈む。

わからなくなる。僕はどうしたい。リーの為に生きるとは望んだ

ことだ。だって、そうでなければ僕は…

ボクデ、ナクナル。

「は、はは…。そうか、そういうことか。」

乾いた笑い声は、心にひびを入れる。

「僕は、僕の為に…」

傲慢で強欲な願い。そうだ、僕は僕で在るために生きていたんだ。リーの為だ、母の最後の言葉だ、そんなことで自分の浅ましさを隠していた。なんて愚かな行為だろう。

「本当に、今も昔も卑怯なままだな。ルーテシア。」

確かに僕は、君だったよ。小さく卑怯なルーテシア。

水鏡の中のルーテシアが笑った気がした。僕はそれを拳で叩いて割った。何度も何度も、ルーテシアは笑って、何度も何度も、僕は彼女を割った。

「俺は、お前が好きだ。」

頭の中で反響した想い。僕へとぶつけられた気持ち。

そうだ。ユリアス殿下が現れなければ、僕はこれに気付くこともなく、最低に最高の生活をしていたんだ。リーの傍で、リーを騙し、リーを愛して生きていたんだ。

貴方のせいだ。貴方が、僕にこんな気持ちをくれるから。貴方が、僕をこんな気持ちにになってしまうから。

お願いだ。僕を、乱さないで。

第十三話（後書き）

ルーテシアさんの心は複雑な様子です。

第十四話

「大丈夫。」

音もなく、風もなく、ただ声が響いて届いた。後ろを振り向けば、そこには大切なあの子がいた。

「…リーティア。」

僕の浅ましさを、彼女は知ってしまったのだろうか。僕はもう、君の隣にいれないのだろうか。いや、初めから隣にいる資格などなかったのかもしれない。そんな僕に、リーティアは静かに微笑んだ。

「大丈夫。私はルーが、大好きよ。」

「…僕は、リーに何が出来る？君の為に、何が…。」

隣にいたいのも、愛したいのも、愛されたいのも全部僕の我儘なんだ。どうしたらいい？

「ルー、笑って。」

「…え？」

ふわりと花の香りが鼻腔をくすぐったと思えば、僕はリーに強く抱きしめられていた。

「私は、浅ましい人間よ。ルーに隣にいてもらう資格なんて、ないかもしれないわ。」

何故そんなこと言うの？リーはこんなに綺麗なのに。

「…でもね、私はルーが大好きなの。大切なの。」

僕だって、リーが大切に、大好きだ。

「私、ルーがいなくなったらとか思うだけで怖くて夜も眠れない。ルーに守られて生きること、慣れてしまっていたの。…そしてそれが当たり前のことだと。」

リーは腕の力を緩め、僕を見つめると、馬鹿でしょう？と笑って見せた。

「そ、んなこと、ない。リーは綺麗だ。僕が守りたかったんだ。僕を守るために、リーを守っているつもりになってただけだったけど……。リーを守っていれば、僕は僕でいられると思っていた。」

「じゃあ、私たち姉妹は揃いも揃ってお馬鹿さんだったってことね。」

リーは本当に面白そうに笑っていた。僕も、本当だね。とんだか笑えてしまった。ああ、君は強いね。いつもいつも、いとも簡単に僕の心を解してしまう。

そうだ、これは本物なんだ。君を想う、この気持ちは。

僕たちはお互いに抱き合いながら、くすくすと笑いあった。経験したことはなかったけれど、きつと子供の頃ってこういう風なんだろうなと考えながら。

「あのね？ずっと、考えてた。」

リーが唐突に話を切り出した。

「何を、考えていたの？」

「私たちの、未来。」

「それ、ずっと言ってるね。どういうこと？」

リーが、大したことじゃないのよ。と一つ前置きをすると、
「私は、いえ私たちは、お互いに依存していたんだと思うわ。だってそれが何より心地よかった。」

その通りなのだ。僕たちは、心地よさに甘えていた。僕が頷くと、
リーは少し申し訳なさそうに目を伏せる。

「……私聞いてしまったの。私たちの本当のお母さんが、ルーに残した言葉のこと。」

「え、もしかしてユリアス殿下に話していた時のこと？」

リーが苦笑する。肯定なのだろう。

「両親が憎いと思ったわ。ルーを苦しめて、言葉で縛って。……でも、何より許せなかったのは、ルーを縛り付けていた一番のものが私自

身だつてことだった。私は、そこでやつとルーに自由になってほしいと思えたの。」

「自由…。」

「ええ。私たちはもう力のない子供ではないわ。手を引かれなくても、自分で歩ける。今、私たちに必要なのは依存ではなく、支え合うことよ。」

そう言うリーの瞳は、これまでに見たことない光を宿していた。生きている、強い光だった。

「それが、僕たちの未来？」

「未来、の一つね。」

「一つ？」

いくつもあるものなのかな。首を傾げる僕に、リーはおもちゃでも見つけた子供のように笑って言った。

「ルー、ユリアス殿下のこと、好きでしょう。」

「はあ!？」

「僕は、そんなの知らないよ。」

「もう!素直じゃないんだから。」

「素直も何も…。」

好きじゃ、ないし…。

「ユリアス殿下を見るとドキドキする。」

うつ。

「ユリアス殿下に触られると鼓動が速まる。」

うつ。

「ユリアス殿下が名前を呼んでくれるだけで嬉しい。」

うつ。

僕の反応を見ると、リーはやっぱり笑って言った。

「ほら、好きなんじゃない。」

「ち、違うよ…。」

「どうして？」

「だって、僕はそんな風に人を好きになっちゃいけない……。」

リーはそれを聞いてわざとらしく、大きなため息を吐く。

「ねえ、ルー。さっきも言っただけど、私たちの未来は自由に生きることよ。自由に生きるんだから、恋くらいしてもいいに決まってるわ！」

「それ、今初めて聞いたよ。」

「認めなさい。」

僕の不満の声は、完璧に無視された。リーはそんなこと関係ないとも言つかのように、僕を睨む。多少強引だが、きっとこうでもされない僕は一生これを認めることなど出来ないだろうな。

そう、本当は気が付いていた。彼が僕に一目惚れだと言ったように、きっと僕も一目惚れだったんだ。

「リー。僕は、ユリアス殿下が好きだよ。」

ユリアス殿下に、恋をしているんだ。

戸惑うことも、苦しいことも、嬉しいことも。全ては彼のくれたこの気持ちゆえ。僕はユリアス殿下に恋をした。それを認めた瞬間に、僕を縛っていた何かが解けた気がした。

きっとそれは、心が解き放たれた感覚。

第十四話（後書き）

大切だから。それで世界は絶えず回る。

幕間四 リーティア

「彼女、ルーテシアっていったっけ？君のお姉さんなんだよね？」

今私の隣の前を歩く男は、クライア王国第一王子アリオズ・クラ
イア殿下。

「ええ、そうですね。私てつきり、そういうことは全て知っている
のかと思っていましたけれど。」

こんなこと、この男には嫌味にもならないことは知っている。

「何故、そう思うのかな。」

彼は立ち止まって、こちらを向いた。

「…殿下の目的が、ルーテシアだからですね。」

「へえ、それは興味深い。」

白々しい。私は知っているのよ。口元こそ笑っているが、その瞳
がほんのわずかも笑っていないことを。瞳に宿るのは、一点の曇り
もない疑念。この男は、ルーテシアを疑っている。

「大丈夫ですわ。ご安心を。私の姉、ルーテシアはそんな器用なこ
と出来ませんもの。」

私は、彼の瞳から目を離さなかった。彼が弟を想うように、私も
姉を想っている。それが伝わればいい、そう思ったただけだけだ。

「…。」

心なしか、彼の瞳に揺らぎがあった気がした。驚いたような、呆
れたような、そんな揺らぎ。

「君の言うところの器用が何かわからないけど、君のお姉さんが不
器用なのは本当のようだね。」

殿下の瞳が、また揺らいだ。

殿下としばらくそのまま散歩のような、尋問のような時間を過ごしていると、視界の端に私の愛するルーを見た。

「ルー？」

「ん？どうした…。」

アリオズ殿下の言葉を全て聞く前に私は走り出していた。長いドレスを踏まないように走るのは、なかなか難しいものがあるのよね。幼いころなどは、ルーと共に走り回っては怒られたものだけど。私、走りには自信あるのよ。こんなドレスじゃなきゃね。

「ルー、どこ？こっちに行っと思ったのだけど…。」

まったくユリアスは何をしているの！などとぶつぶつ呟いていたら、水面を叩く音が聞こえた。その方向へ行くと、綺麗で大きな湖が広がっていて、そこにルーテシアがいた。笑いながら、自分の映る水面を何度も叩いていた。それはあまりに異様な光景だったが、何故だかそれをするルーの気持ちかわかる気がしていた。

「大丈夫。」

気がつけば声をかけていた。私の名を弱弱しく呼ぶ彼女に、私は微笑んだ。

「大丈夫。私はルーが、大好きよ。」

「…僕は、リーに何が出来る？君の為に、何が…。」

返ってきたのは、痛々しい質問だった。彼女が、傷ついている。大切なルーの心を救いたい。ルーを救うには、私の心の内をさらけ出さなきゃ駄目なんだ。

「ルー、笑って。」

「…え？」

私は、困惑するルーに抱きついた。ルーを癒すことももちろんあるけど、私はきつとルーの顔を見て話せないから。ごめんね、私こんなに弱いよ。

「私は、浅ましい人間よ。ルーに隣にいてもらう資格なんて、ないかもしれないわ。」

ルーの肩が揺れた。私はそれを一層強く抱きしめた。

「でもね、私はルーが大好きなの。大切なの。私、ルーがいなくなったらとか思うだけで怖くて夜も眠れない。ルーに守られて生きること、慣れてしまっていたの。…そしてそれが当たり前のことだと。」

これが私の心なの。浅ましい心を吐露するのは、本当に居た堪れない。

「馬鹿でしょう?」

こうやって微笑むのが精一杯だった。

「そ、んなこと、ない。リーは綺麗だ。僕が守りたかったんだ。僕を守るために、リーを守っているつもりになってただけだったけど…。リーを守っていれば、僕は僕でいられると思っていた。」

ルーは泣きそうな顔で言った。そんなこと、何にも悪くないのに。優しいルー、テシア、貴女は昔から変わらない。ずっと、優しく綺麗なまま。

「じゃあ、私たち姉妹は揃いも揃ってお馬鹿さんだったってことね。」

お互いにおかしなことに囚われすぎたのよ。私が笑うと、ルーも本当だねと笑ってくれた。

そう、これは本物なの。貴女を想う、この気持ちは。

ひとしきり笑いあつて、私は考えていたことを言おうと決意する。

「あのね?ずっと、考えてた。」

ルーが、きょとんとこちらを見る。

「何を、考えていたの?」

「私たちの、未来。」

「それ、ずっと言ってるね。どういうこと?」

私は大したことではないことを告げてから、私たちの未来について語った。依存ではなく支え合うこと。ルーに自由になってほしい

こと。そして、その端々にそれでも傍にいてほしいということを忍ばせた。

未来について語った後、私ははつきりさせておきたいことをルーに聞いた。

「ルー、ユリアス殿下のこと、好きでしょう。」

「はあ!？」

「僕は、そんなの知らないよ。」

「もう!素直じゃないんだから。」

「素直も何も…」

ルーは頑なに認めようとはしなかった。けれど、私の中で確実になっているそれをルーに尋ねてみた。

「ユリアス殿下を見るとドキドキする。」

ルーが図星の顔をした。

「ユリアス殿下に触られると鼓動が速まる。」

彼女の顔はどんどん赤くなる。

「ユリアス殿下が名前を呼んでくれるだけで嬉しい。」

終いには、恥ずかしそうに俯いてしまった。ここまで気づいていて、何故認めないのかしら。若干呆れつつも、私は笑って言った。

「ほら、好きなんじゃない。」

「ち、違うよ…」

なんでまだ認めないのよ…。

「どうして？」

「だって、僕はそんな風に人を好きになっちゃいけない…」

なんてことなの。そんなくだらないことにまだ縛られてるなんて私はわざとらしくため息を吐いた。

「ねえ、ルー。さっきも言ったけど、私たちの未来は自由に生きることよ。自由に生きるんだから、恋くらいしてもいいに決まってるわ!」

「それ、今初めて聞いたよ。」

そんなの関係ないわ。

「認めなさい。」

睨む先のルーはほんの少し驚いた顔をしたけど、諦めた様子で私に言った。その、幸せな報告を。

「りー。僕は、ユリアス殿下が好きだよ。」

ユリアスに恋をしていると、彼女は確かに言った。その瞳は、彼女を縛っていた何かから解き放たれたように輝いていた。

ああ、これでやっと羽ばたく準備が整った。

そして私も気が付いている。私の中にも、見ただけでドキドキしたり、触られるだけで鼓動が速まったり、名前を呼ばれるだけでも嬉しくなる、その気持ちが存在しつつあることを。

私は、認めることが出来るだろうか…。

幕間四 リーティア（後書き）

リーティア主人公の話を「それはまるでシリーズ」的な感じでやりたくなってきましたね。

第十五話

リーと別れ、部屋で僕はある人を待っていた。謝らなければという思いと、話したい思いが僕の中にせめぎあっていた。

こうしいると、やはり僕はあの人が好きなのだなと感じる。それを認めることは容易なことじゃない。けれど、その瞬間はこの上なく幸せに感じるのだろう。正しく僕が、そうであったように。

恋をしている。でも、それで僕の何が変わるのだろうか。変わることは、とても怖いと思う。今更、というのもそうだが僕は僕に自信がない。彼は、変わっていく僕をどう思っただろうか。

「ルーテシア…。」

声に振り返れば、リーに対するものとは全く別の愛しい相手が立っていた。

「…ユリアス、殿下。」

彼の瞳には、不安や戸惑いが映っている。恐らく、僕がユリアス殿下を拒んだことに原因があるのだろう。

「えと、さつきはごめんなさい…。混乱してしまって。」

貴方を拒みたいわけではない。嫌いなわけではもったない。けれど、とてもそんなことは言えなかった。

「俺も、いきなりすまなかつたと思っている。」

彼の瞳の色はその不安をまだ、色濃く残している。こんな目をさせたわけではないのに。愛しいと感じたその瞬間から、こんなにもユリアス殿下が自分の中を占めている。

「ごめんなさい。驚いたけど、大丈夫ですから。」

僕にはこうして、素直に笑って見せるしかないのが酷くもどかしい。他の、そう例えばリーなどであれば、もっと上手く元気づけてあげられるのかな。

僕の視線の先のユリアス殿下は、驚くほどに狼狽していた。効果があるのかないのかさえもわからないので、僕は笑顔を崩すことが出来なかった。

「……！」

彼の姿が一瞬揺れたかと思えば、僕はその腕の中へと引き込まれているのに気がついた。

「え、あの、ユリアス殿下……？」

声が震えるのがわかる。気づかずドキドキするのと、恋をしていることを自覚した後のドキドキでは全く違うんだなあ……。なんて思わず考えた。そうでなくては耐えられないから。

彼は無言でただ僕を抱きしめている。なんでこうも愛しいのか。何かが伝わってくれないかと、僕がその背中に手を伸ばした瞬間。

「ユリアス様はいらっしゃる……！」

部屋の扉を破る様に飛び込んできたのは、綺麗な女の人だった。

「……フィニナ？」

ユリアス殿下は僕を抱きしめていた腕を緩め、たった今飛び込んできた女性を見てそう言った。フィニナというのは、この人の名前だろうか。

「ユリアス様！探しましたわ！」

彼女は僕など目にも入らない様子で、ユリアス殿下に近寄る。先ほどまで彼に伸びかけていた腕は、あっけなくも僕の体へと戻されていた。

「何故お前がここにいる。」

「ユリアス様に会いに来たに決まっていますわ。」

その言葉を紡いだふつくらとした唇に、赤くひかれた口紅が彼女の整った顔立ちをより一層引き立てて、美人というのはこういう人を言うのだなと思った。そして、この人もユリアス殿下のことが好きなのだということもわかった。

かなわない。僕がそう思ってしまうのを、誰が止められただろうか。

フィニナ様は、オルソン家と肩を並べる大貴族シェリードの一人娘であった。一介の執事、それも今までのほとんどを男として生きた自分とは何もかもが違う。僕はまだ、女にさえなっていないというのに。

「あら。」

フィニナ様は、ようやくユリアス殿下の隣にいた僕に気付いたように、僕を一瞥すると見下したように笑った。

「貴方、私ユリアス様とお話がしたいの。席を外してちょうだい？ 貴方のような方がいては、楽しくお話出来ませんわ。」

「…失礼します。」

そう言うしかなかった。その場を離れるしかなかった。ユリアス殿下の、僕を呼ぶ声にも蓋をした。ユリアス殿下は遠い人。僕などが恋をしていいはずがない。

ああ、貴方にはいつも泣かされる。嬉しいことも悲しいことも全ては貴方の為。好きになって、ごめんなさい。

これはきつと罰だ。ユリアス殿下の傍にすることを望んだ僕の、罪なんだ。

第十五話（後書き）

ずいぶんと更新が遅くなりまして申し訳ございません。

さて、恋敵の登場ですかね？フィニナは典型的なお嬢様であってほしいです。

第十六話

『貴方のような人。』

あの嘲笑と、見下した物言いが、僕と彼女の決定的な違い。一方は大貴族の令嬢。もう一方は捨て子の執事。彼女にとって僕などという存在は、取るに足らないものだろう。いや、彼女だけではない。貴族にとってそれは大切なことではないのだ。きっと、彼もそうだと僕がいなくなつたところで、彼もまた別の人を見つけるのだらう。それがこの世の「正」なのだ。

「…つつ、ふ…。」

泣いてはいけない。誰かに悟られてはいけない。そう思うのに、塞いだ唇からは、嗚咽が漏れる。

今すぐこの場から消えてしまいたい。けれど、リーを置いてはいけない。ああ、こんな時にまで君を言い訳にってしまうのか…。君に、縋ってしまうのか。

「何か、仕事が…したい。」

気を紛らわせるために、忙しく体を動かしたかった。オルソン邸に戻ったら、またあの日常が手に入るだろうか。

「仕事なら、ありますわよ。」

顔を上げた先には、小麦粉の袋を担いだ二ナが立っていた。大の男でも重く感じるであろうその袋を、二ナは涼しい顔で肩に乗せている。小柄な彼女にはお世辞にも似合う姿ではなかった。

「…それ、何するの？」

「ルー様、お菓子を作りますんこと？」

「は？」

いい、ともいや、とも返事をする間もなく、僕は二ナによって調

理場へ連れて行かれた。ここが一別荘であることを一瞬忘れてしまふほどに、その調理場はかなり整っていた。料理好きな二ナが浮かれるのもよくわかる。

二人きりの調理場で、小麦粉をふるいにかける音が静かに響いている。

「ユリアス殿下のことですか？」

「え？」

積もった小麦粉から二ナに視線を移すと、二ナは僕に目もくれず黙々と作業を続けていた。それでも、意識は僕に向いているようで、会話を続けた。

「さつき、泣いていましたわ。」

見られていたのか。そう思うと、恥ずかしいような情けないような。何も言わない僕に、二ナはほんの少し視線を上げ、また視線を落とした。

「ユリアス殿下は、ルー様を大切に思っていますわ。」

「え、何故？」

「見ていてわかりますもの。恐らくリー様やアリオズ殿下もお気づきでしょう。」

いつも間延びしたような口調の二ナが、この場で淡々と話している。それが何だか変に現実感呼び起こす。

「でも、僕は……。」

「何故迷うのですか？ユリアス殿下のことが好きなのでしょう？」

好きなのでしょう？そう聞いた二ナの瞳は、真っ直ぐ僕を見据えていた。

二ナは執事長のロークの娘で、拾われたばかりの僕たちと一番最初に仲良くなった。年が近いこともあって、僕ら二人の世界に自然と入りこんで来ていた。

初めは警戒心をむき出しにして、二ナに酷いことを言ったことも

あった。傷つく前に傷つけてしまえ。当時はそういう考え方しか出来なかったから。けれど、それでも二ナは何度も僕たちの目の前に現れた。今も昔も変わらない、その屈託のない笑顔で。そしていつの間にか僕たちは笑っていた。僕らの世界に、初めて他の誰かが存在した瞬間だった。

それから、私であつたルーテシアが僕というルーになつても、二ナとの関係はどんな変化もせず今も繋がっている。

だからこそ、僕は二ナには隠し事は出来ないだろう。なにせ彼女が、存在を認めてほしい僕の心も、守られていることに慣れたりーの心も、その双眸で見抜いていたのだから。

「二ナ、僕は臆病者なんだ。」

そう呟けば、満足そうに二ナは微笑んでまた作業に戻った。存分に吐き出してしまえと、そういうことなのだろう。

「さつきね、シェリードのフィニナ様に会ったよ。」

「ああ、先ほどの騒ぎはそれでしたか。」

合点がいったようだ。二ナのいう騒ぎは、フィニナ様の到着したときのことのようなのだ。そんなことを露ほども知らず、僕はユリアス殿下に抱きしめられた。それがどれほど罪深いかもわからず。

「綺麗な、人だった。僕には、到底かなわないって……。」

そう思つたんだ。という言葉は、ため息とともに抜けて消えた。

こびりついたフィニナ様の姿も、声も、とても恐ろしく思えた。

「それで、泣いていたというわけですか。」

二ナは呆れたように言った。二ナにしてみれば、確かにくだらないことなのかもしれない。でも、僕にしてみれば……。

「それで、というわけではないんだけどさ。僕はただの執事で、あつちは貴族の一人娘。どう考えても、ユリアス殿下の為になるのはフィニナ様だと思うんだ。男として生きる選択は間違っていたとは思えないし、今更女に戻るのも憚れる。僕は、彼にふさわしくなれないんだよ……。好きになることの方が、可笑しな話なんだ。」

自分に呆れてしまう。そんな風に笑えば、二ナは心配そうな目を向けた。

「そんなこ…。」

「そうですわ。」

そんなことない。と二ナは言いたかったのだろう。だがそれは凜とした声に消えた。こびりついたものと合致するそれに視線をやれば、その美しい姿が目に入る。

フィニナ様は汚いものでも見るかのように、僕を睨んでいた。

僕は、情けなく笑った。

第十六話（後書き）

ニナは裏表が激しい性分か。

第十七話

その人はただ立っていた。綺麗な容姿と、それに見合う美しいドレス。凛々しいその姿は、その全身でフィニナ・シェリードという存在を語っていた。けれど、その人の顔は今、これでもかというくらいに歪んでいる。それは侮蔑の表情。

「…何か御用ですかあ？」

いつもの間延びした口調で二ナは話しかける。しかし、二ナの顔にもまた機嫌の悪さが見て取れた。それでも、使用人独特の愛想笑いを忘れていないのが流石というところか。

「貴女に用はなくなつてよ。」

そう言つて鼻で笑うと、フィニナ様は僕を見た。

「貴方、先ほどもお見かけいたしましたわね。」

「…はい。」

僕は失礼のないように背筋を伸ばす。心底見下されていてもこういう姿勢になるのは、使用人の悲しい性なのだろうか。

「話を聞かせていただきましたわ。一応弁解しておきますけど、聞きたくて聞いたものではありませんわ。偶々聞こえてきたのです。」

結局立ち聞きですわ。という二ナの呟きは無視することにする。上げ足を取られたフィニナ様も、一度は二ナを忌々しそうに睨んだがすぐに話を戻した。

「ルーテシア、でしたかしら？」

「は、はい。」

何故僕の名前を？そう思った僕に気付いたのか、フィニナ様はユリアス様がそう呼んでいましたもの…。と少し切なげに言った。しかしそれも束の間、フィニナ様は今までになく真剣な面持ちになった。

「私はあの方を愛していますわ。」

体を貰われるようだった。そう言える彼女への羨望と、そう言えない僕への絶望が、心の奥を抉った。

何も、言えなかった。何を言えいいのかさえもわからなかった。言葉を発することが、とてつもなくいけないことのようにも思えた。すると、痺れを切らしたかのようにフィニナ様が僕に吐き捨てた。

「男でも、女でもない貴方などに、ユリアス様は渡しませんわ。貴方が言っていたように、貴方はあの方にふさわしくない。」

そう言って、そのまま踵を返して消えてしまった。

痛い。痛い。いたい。イタイ。体が？胸が？心臓が？…心が？

わからない。苦しいとか辛いとかを思う前に、痛い。刺されるような痛みとは違う。こう、大きな何かに握りつぶされているような感覚。それは憂う暇さえも与えてはくれない。

遠くから、二ナの声がする。僕を呼んでいるようだ。軋む体をどうにか動かし、僕は笑った。

「さあ、二ナ。お菓子作りの続きをしようか。」

甘いものを食べたら、少しは楽になるのかな。

会話もなく淡々と作ったお菓子は、程よい甘さで美味しかった。

けれど、楽になる効果は全くなかった。

「…美味しいね、これ。」

僕がそう言った先の友人、二ナは近年稀に見る不機嫌さだった。

これは長年の付き合いで分かったことなのだが、彼女は虫も殺さぬような顔をしてその実、怒るとかなり恐ろしい。

そしてその恐ろしい彼女が口を開く。

「不味いですわ。」

「へ？」

上手く焼けていると思うんだけど…。それに二ナだって結構な

量を平らげているはずだ。

「そうじゃありません。このお菓子はとっても美味しいです。けど……。」

そこまで言つて、一度途切ると片肘をテーブルについて僕を睨む。
「ルー様のその顔を見ると、不愉快で美味しいものも美味しく感じられませんか。」

不愉快と来たか。

「僕の顔、なんか付いてる？」

「目と鼻と口が付いてますわ。」

えー…そういうことじゃないんだけどなあ…。絶句する僕の顔を見て、二ナは呆れたようにため息を吐いた。怒ることに飽きたようにも見える。

「…貴女の性格は重々承知していますけど、私が気付かないと未だに思っているなんて。呆れ果てて笑ってますわ。」

そう言う二ナは一欠けらも笑ってはいない。かと言って、怒っているようにも見えない。本当に呆れ果てているのだろう。僕が苦笑すると、二ナは僕の両頬を引っ張った。

「い、いひゃい…。」

「無理に笑わないで。」

それは、二ナの本気だった。

そうだね、二ナ。君がこれに気が付かないなんてあるわけなかったんだ。

第十七話（後書き）

強がりの先に、小さな心。

幕間五　二ナ

「お前なんか信じられるか。」

女の子はそう言いました。酷く、怯えた瞳で。けれど、その背にしつかりと妹を守って。父様に聞いたところによれば、この子たちはとても辛い思いをしていたそうです。でも、そんなことは私には関係のないことでした。何故なら、私には『辛い』という気持ちがわからなかったから。

「信じなくてもいいですわあ。」

私はいつものように笑います。そう、いつものように殺意を秘めて。

私の名は、二ナ・プロフェリード。父の名は、ローク・プロフェリード。大貴族であるオルソン家に仕える執事と、その娘。それが表の顔。しかし私たち親子の本当の仕事、それはオルソンの敵を排除すること。何も殺すことだけが全てではなく、その存在自体を消すことさえも時に実行することがありました。生きていた証を根本から断つことは、まだ私が幼いからとさせてはもらえません。私はもっぱら、ただ殺すことを命令されていました。それに疑問を感じたことはありません。オルソンの人々を狙うのはほとんどが盗賊や暗殺者という罪人たちでしたから、同情すら感じませんでした。

初めて仕事をしたのは今から一年ほど前。というより、偶然にも侵入者を発見し、そのまま殺しました。それを父様に報告すると、一度は驚いたようでしたがすぐに

「怖くはなかったのか。」

と聞きました。怖くなんてありませんでした。そんな恐怖心などを抱かぬように育てて

きたのは父様ではありませんか。

「怖くなどありませんでしたわあ。」

そう笑うと、父様は私の頭を撫でながら言いました。

「今日からお前はオルソンの番犬となれ。」

その日から私は、この牙で罪人を穿つことを許されたのです。

彼女らは罪人ではない。まだ、対象になりうる存在ではない。

だから、こうして微笑みかける必要もない。けれど今、私はここにいて笑っている。とどのつまり、興味がありました。私と同じような子供など、今まであまり見たことがなかったのです。

「二ナ・プロフェードですわあ。二ナと呼んでくださいませ。」

私が一歩近づぐことに、彼女らは一歩下がります。

「何を怖がっていますのあ？」

「なっ！怖がつてなんかない！」

虚勢なのはすぐにわかりました。一瞬怯んだその隙に、私は一気に距離を縮めます。前方の彼女が大きく肩を揺らし、それから一拍おいて後方の女の子が転びました。

「きゃっ……！」

「リー……！」

幸い床は柔らかいカーペットが敷いてあったので、怪我はないようです。それより不思議だったのは、転んだほうの女の子の手が空を彷徨ったことでした。

「リー、私はここにいますよ。」

「……あ、ルーそこにいたのね。」

その瞳の焦点は何にも合ってはいません。手を差し伸べる姉の姿も、その瞳には映っていないようでした。

「大丈夫ですかあ？ごめんなさい、私のせいですわあ。」

そう言っただけでもその子の手を取る。それは一瞬震えましたが、そのぬくもりは優しく私の手を包みました。

「あ、ありがとう。」

彼女は私のことも見ませんでした。可愛い笑顔をくれました。隣の姉の方は、警戒心剥き出しで私を睨んでいます。光を失った妹を思えば、仕方のないことに思えます。

「あり、がと...」

驚きました。彼女は未だ私を睨んではいましたが、はつきりと私に言いました。凄く、凄く嬉しかった。

けれどそれは、酷く惨いものにも思えたのです。

私は、人を殺します。そんな私に、彼女らは酷く綺麗に見えました。

「ニナ、遊ば！」

ルーテシアとリーティア姉妹のところへ通うようになって一週間。リーティアは何故か私に懐いてくれました。ルーテシアも、リーティアが気に入っているものを無下に出来ないのか、複雑な表情で私たちを見ています。

「今日はお庭へ行きましょうか？」

そう提案すれば、リーティアは喜んで賛成し、ルーテシアも渋々ながら着いてくる気はあるようでした。

これが、私たちの関係を変える大きな分岐点となるのですが、それは私でさえ知ることの出来ないことなのは言うまでもないでしょう。

変えたい、変わりたい。そう願ったのは、一体誰だったのでしょ
うね？

幕間五 二ナ（後書き）

二ナ視点はもう一話続きます。

幕間六 二ナ

ああ、今だけは、この時だけは、私のこの運命を呪いたい。

「風が気持ちいいねえ！ルー、二ナ。」

目が見えない分、その全身で全てを感じようと、リーティアは大きく手を広げます。

「リー、危ないよ！」

ルーティアは、リーティアに気を配りながらも楽しそうに笑っています。

「楽しいですわあ。」

私と言えば、口調こそ同じなれども、その内側の变化に戸惑っておりました。いつの間にか私はこの三人で遊びまわる時を、本心から楽しんでいることがありました。そして、いつの日か何にも囚われることなく平和に暮らしていたいと。

番犬と呼ばれたあの日から、この身も心もオルソン家に捧げたはずなのに。これ以上乱される前に、いつそ殺してしまおうか…。

「きゃあっ！」

「……リー……！」

混沌とした私の思考を呼び戻すかのように、それは響きました。そちらを見やれば恐らく殴られたであろうリーティアと、殴ったであろう男がありました。

「う……う。」

「……リー！しっかりして、リー！」

ルーティアは、リーティアを抱きながら、泣いていました。今まで感じたことのないものが、私の中に溢れるのを感じました。

「……。」

目の前の男は、左手にナイフを持っていました。あれでリーティアが刺されなかったのが幸いです。

「モルテニア・オルソンはどこだ。」

男は私に問います。私は…。

「侵入者を発見。即刻、排除します。」

全ては一瞬で終わりました。男のナイフは私の頭上の空を切り、私はそのまま地を蹴り、隠し持っていた自分のナイフで男の喉を刺しました。男は短く呻きましたが、すぐに事切れました。

「…二、二ナ？」

ああ、そうでした。顔だけ動かして、横目で覗けば、リーティアを胸に私を見るルーテシアがいました。怯えて、しまったのでしょ
うね…。

ごめんなさい。と口にしようとしたその時でした。

「…赤いの、男のひと、二ナ、…ルー？」

それはリーティアの声でした。その一つ一つの単語は、繋げてみれば正しくこの状況を指していました。つまりは、

「…リー、見えて、いるの？」

リーティアの瞳は真っ直ぐにルーテシアを見ていました。そして小さく頷きました。殴られたことが、何らかのきっかけになったのでしょうか。けれど、何故今なのですか？見られなくなかった。その時ほど、貴女の光が失われていたことに感謝したことなどなかったのに！

「…ご、ごめん、なさ…。」

「二ナ、泣かないで？」

リーティアは私に手を伸ばします。血で汚れた、私に。

「…怪我はないの？二ナ。」

何故、ルーテシアまで…。こんなに汚い私に、何故そうも優しいのですか？

気が付けば、私は泣いていました。とても『辛かった』。傍にいたいと願うのが、とても辛かったのです。けど、それでも傍にいたことが嬉しかったのです。

私は二人の腕の中で泣き続けました。そしていつしか、笑っていました。その時から、私たちの世界が始まったのです。

ムカつきますわ。今、私の目の前に座る大切な友人は、気持ちの悪い顔をしています。理由は、先ほど乱入してきたフィニナ・シェリード嬢。

フィニナ嬢は、私たちの話を立ち聞きした揚句、くだらないことを吐き捨てていきやがりましたわ。どうしてくれよう、と考えていた矢先にこのルー様が無理に笑うものだから、とても不愉快です。そして、このルー様をこんな風にしたあの女も。

「…美味しいね、これ。」

ルー様は尚、その不愉快な顔を私に向けます。

「不味いですわ。」

そう言えば、とても不思議な顔をしました。お菓子は不味くないと言いたげだ。

「そうじゃありません。このお菓子はとっても美味しいです。けど…ルー様のその顔を見ると、不愉快で美味しいものも美味しく感じられませんわ。」

そう睨むと、やっぱり不愉快な顔をして

「僕の顔、なんか付いてる？」

などと言いました。私は意地悪く、

「目と鼻と口が付いてますわ。」

ぽかんとした間抜けなルー様を見てみると、こうして怒っているのが馬鹿馬鹿しいですわ。私は深くため息を吐いた。

「…貴女の性格は重々承知していますけど、私が気付かないと未だに思っているなんて。呆れ果てて笑ってしまいますわ。」

自分でもわかつている。私は、笑っていない。すると、またルイ様は気持ち悪い顔になりました。心の底からムカついたので、思いっきり両頬を抓ってやりました。

「い、いひゃい…」

「無理に笑わないで。」

私は、無理に作った貴女の笑顔など見たくはないのです。

オルソンの番犬は、大切な者を護る番犬。どんな敵も穿って見せましょう。綺麗で小さな、二人の為に。

幕間六 ニナ（後書き）

ルーテシアとリーティアに出会った後のニナは、格段に強くなっています。

第十八話（前書き）

かなり間が開いてしまいました…すみません。
今回は少し短めになってしまいました…すみません。

第十八話

リーやリーを取り巻く大切な人の為に何かをすることは、僕にとつてとても大事なことで、決して自己犠牲ではないしましてやそれに美学を感じてもいない。けれどそれは確かに、綺麗事ではあるのだろう。

「無理に笑わないで。」

二ナに言われたこのことでさえも、僕にとっては心配してほしくないと思ったからのこと。それは酷く不格好で、二ナに通用するものでは到底なかったけれど。

でも、本当に心配なんていらなんだ。彼女と僕の意見は同じ。

『ルーテシアにユリアス殿下はふさわしくない。』

フィニナ様を前にして、嫌というほどにそれを味わった。逃げ出したくて仕方がなかった。でも逃げ出さなかった。立ち向かう勇氣でも、足が竦むような恐怖でもない。そこに居なくてはいけない気がした。ここで逃げてしまえば、これから今までも全てにおいて、僕というものが崩れるような気がした。

あの胸の痛みも、決して彼女の言った言葉が辛かったのじゃない。「私はあの方を愛していますわ。」

あれほど強く、はつきりと断言した彼女が羨ましかったのだ。僕がいくらこの声でか細く愛を呟いても、それは日々の喧騒に掻き消されてしまっただろう。二ナにも言ったように、僕はあまりに臆病なのだ。

彼が遠い存在だから?...違う。

男として生きてきたから?...違う。

リーから離れられないから?...違う。

そう。どれも違う。つまりは、自分が傷つきたくないんだ。ふさわしいとかふさわしくないとかも関係なく。ただ、怖いのだろう。こんな風に冷静に客観的に自分を見れるほどに、僕は恐れている。けれど不思議とこの気持ちを確認しなければ、気づかなければという感情はなかった。こんなに怖いの。こんなに弱いのに。それでも、想う心は募るばかりで。だから、精一杯彼の幸せを願うのだ。だからこそ。だからこそ僕は、もう言い訳はしたくない。

「…ねえ、二ナ。」

僕は、今だ真剣な目をして、深く僕を見つめる彼女に声をかけた。二ナは僕の変化を感じ取ったように、全身の力を抜く。

「…なんですかあ？ルー様。」

口調も、いつものものに戻っている。さて、どう話したらいいものか。

「二ナ、僕はフィ二ナ様のように強く、ユリアス殿下への想いを言えない。」

二ナは、何が言いたいのかわからないようだった。

「…その時点で、僕は彼に対して真剣ではないのじゃないかと思う。」

「ルー様あ、何が言いたいのかわかりませんわあ？」

二ナの眉間に皺が寄る。理解不能をばかりに首を傾げている。

「だからね？つまり、フィ二ナ様のようにユリアス殿下を想っていないってこと。」

「…つまり恋心ではないってことですかあ？」

僕はそれは違つと、首を横に振る。

「僕は、ユリアス殿下を知らない。今のままでは、今のルーテシアでは、ユリアス殿下の隣にはいられない。僕が、それを許せない。」

二ナは、一瞬驚き、そして笑った。

「向き合う決心をしたと、そういうわけですねえ。」

そう。向き合わなければ。この想いにも、自分にも。全く馬鹿げた話だ。ついさっきまでは、こんな自分がユリアス殿下に恋すること自体が可笑しいのだと思っていたのに、今ではならばつりあう女になってみせようと思っている。

フィナ様のようにはなれないかもしれない。いや、なれないだろう。でも、彼女には感謝しなければ。彼女の存在と、その言葉で僕はここに立つ準備が出来た。フィナ様は僕に言った。

「男でも女でもない。」

そう言った。ならば…

男でも女でもない僕は、男にも女にもなれるということだろうか？

第十八話（後書き）

向き合うことも、逃げ出すことも、全ては自分に繋がっている。
ならば選択しよう。より自分が、自分であるための選択を。

第十九話

「ふむ。どうしたものか。」

二ナと別れ、手土産にでもと籠いっばいの菓子を手し、僕は一人
呟いた。

どうしたものか。というのはけしてこの菓子の行方ではなく、僕
の決心についてである。

「……んー、思い切ってこの菓子をぶつけてみるか？」

「それはちよつとどうかと思うよ……？」

短絡的、いやむしろ意味不明な決断にある人物が待ったをかけた。

「アリオズ、殿下。」

「やあ、ルーテシア嬢。」

常に絶やす事のないその笑顔に、いやでも警戒心が疼きだす。こ
の笑顔の裏に何が隠れているのか。それは獰猛な獣のようにも思え
たし、深い闇のようにも感じられた。

「それは、お菓子かい？」

「……ええ。」

「冷たいなあ。」

そうだ。この人は、この国の第一王子。このような返事の仕方では
あまりに不躰だ。

「す、すみません。」

「はは、いいよ別に。しかし君は面白いね。警戒心の強い兎のよう
な反応をするかと思えば、忠義にあつい躰のなつた犬のような振る
舞いをする。」

褒められている……のか？ いや、絶対貶されている！！

少し不機嫌になりながらも、勝手にその場を離れるわけにもいか

ず、そのままアリオズ殿下の言葉を待つ。

アリオズ殿下の顔を捉えたが、その顔にはいつもの笑みなど欠片もなく消えていた。初めてみるその顔に、ほんの少し畏怖を覚えた。しかし、アリオズ殿下の紡いだ言葉に、僕は畏怖の念など忘れて心底首を傾げることになる。

「…それが本当の君なのだろう。」

は？何の意図があつてその質問をしたのだろうか。わけがわかりません。と、とりあえず…。

「さあ…？」

何故この答えに！？もつと考えればよかった！！アリオズ殿下もきよとん。を通り越してばかん。になっている。

「…それ、本気で言ってるの？」

信じられないとも言つかのように、彼は僕に投げかける。彼の欲する答えなど、わからないしわかりたくもないしわかるわけもない。だから、これは僕の意見。僕だけの言葉。

「そうですね。本当の僕がどういった者なのかは、僕自身わかりません。」

ぼつり。ただ独白するかのような流れる口調。僕のそれを、アリオズ殿下は静と聞いている。

「ただ、それでいいのだと思います。先ほどアリオズ殿下が仰った、兎のような僕も犬のような僕も、どちらも僕でありどちらも僕ではない。人は誰しも弱い部分と、強い部分を持っているものです。それがたとえ盲信的なものでも、身を裂くような恐怖であつても。他人にとって否であつても、自分にとっては是ならばそれが自身の理です。触れあつて、ぶつかつて、そうやって変革を起こし否を是にする。もしくはその反対も。本当の自分など、知る必要はない。というか、知ることなど出来ません。変わらないものはないのですし、こうして変わり巡る今が、本当なのではないでしょうか。」

目の前のアリオズ殿下が、何を求めているのかなんて、僕には関係がないから。諭すつもりも、ましてや彼を否定するつもりもなか

った。けれど、彼にはそうではなかったようだ。

「…そうか。」

何やら納得したように頷いた。少しすっきりした様子が見て取れて、次に浮かべた笑顔に、彼の『本当』が見えた気がした。

「これ、もらうよ。」

「へ？」

何を。という前に、アリオズ殿下は僕の持っていた籠からお菓子を抜き去った。そして、その場で食べてしまった。

「うん、よく出来ている。」

「あ、ありがとうございます…。」

何をしたいのか。これはこの場に居合せたなら、僕以外の人間でも感じるのではないだろうか。

「…すまなかった。」

「え？」

突然のことで、何を言われたのか一瞬戸惑った。

「見くびっていた、と言うのだろうか…。君を、他の人間と同じように思っていた。」

何の話なのかな。なんて思うわけもなく。その想いは、僕が今までリーに群がる人間に対し抱いた物と、同じだった。

「ユリアスは、僕の大切な弟だ。中途半端に恋をして、傷ついてほしくはなかった。だから、僕はいつだってユリアスの害になりそうなものは何でも排除した。今回は、君がそうだった。けど、そうではなかった。…いや、そうでなければいいと、願っている。」

ああ、一緒だ。そう思った。大切に、傷ついてほしくなくて、でも幸せを願って。いつか、心の底から愛し合える人に出会ってほしいと。この手から、離れることを望んでほしいと。それがどんなに悲しかろうと、寂しかろうと、誰かに寄り添い笑ってほしいと、そ

う願ひ、祈つてきた。

彼の想いは僕のそれと同じで、少し違つた。きつと、僕よりずっとこの人は苦い思いをしたのだらう。それに、縛られてしまうほどに。疑つた全ての人の、本当を求めるほどに。

気が付けば、僕の手がアリオズ殿下に伸びようとしていて。何と言えるわけでもない、けれど少しでも共有したくて。そうして伸びた手が、アリオズ殿下に届く寸前。

「ルーテシア……！」

愛しいそれに振り向けば、肩を怒らせ僕を睨む彼がいた。

ユリアス殿下、僕はどう貴方に伝えたらいいの？

僕の想いも、アリオズ殿下の願いも、今すぐ貴方に届けばいいのに……。

第十九話（後書き）

ずいぶんと間が開きました…。

皆様地震の被害など、生活やお体は大丈夫でしょうか？いまだ安心できる状況ではないかと思うと、心配でなりません。気を紛らわせるというのはおかしいかもしれませんが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第二十話（前書き）

とんでもなく遅くなってしまいました…！この作品を読んでくださっている皆様には大変失礼を致しました…。

今までより遅筆になるとは思いますが、更新頑張りますのでこれからもよろしくお願いいたします！

第二十話

「ユリアス…。」

「…何を、やっているんですか、兄上。」

実兄を責めているようで、それは真実僕を責めていた。射ぬかれるような視線に、どうしても顔をそらせなかった。

「ユリアス。」

どうしたら…と考えあぐねている間に、アリオズ殿下が口を開いた。

「僕は、お前が僕の弟である以上、お前にはふさわしい女性をと考えている。」

その言葉に、僕はビクリと体を震わせ、ユリアス殿下は眉を顰める。

「でもね、たとえその女性が現れても、お前が彼女を傷つけているようでは認められない。もし、本気で手に入れたいなら、彼女の覚悟も誇りも全て守る強さを持て！」

「アリオズ…殿下？」

「兄上…。」

アリオズ殿下はそういうと、柔らかに微笑んで立ち去った。去り際、僕の耳元で

「…少しすつきりした。ありがとう。」

と残して。

アリオズ殿下が去って、ここには僕とユリアス殿下しかいない。当たり前だが、気まずい。沈黙が空気を支配して、どうにも居た堪れない気分だ。

「…えっと、お菓子…食べます、か？」

この状況を打破すべく口から漏れたのは、この場にそぐわない気の抜けたものだった。ああ、これほどに口下手なのを恨んだことはない！

失敗した。そう思った。視線を合わせるのも恥ずかしくて、思わず俯いた。けれど、

「一緒に…一緒に食べよう、ルーテシア。」

頭上から降り注いだその声は、あまりに優しく、なんだか切なかった。

何処まで行くんだろうか。前を歩くユリアス殿下は、時折こちらを振り向きながら口を閉じたり開いたりしている。僕も何か話さなければと唇を動かそうとしているのだが、どうしても出かかった言葉を飲み込んでしまう。

これではだめだ！何か！何か言え！言うんだルーテシア！

「あのっ！」

「なあ。」

「「え？」」

二人の声が重なってしまった。

「あ、ユリアス殿下からどうぞ…。」

「い、いや、ルーテシアから話せ…。」

お互いが譲り合い、全く話が進まない。すると、ユリアス殿下が短く溜息を吐いた。

「はあ…。駄目だな、俺は。」

「へ？」

何が駄目なのだろう。

「俺は、想いさえ伝えればそれでいいと思っていた。お前に、愛していると告げればそれでいいのだと。」

そうしてユリアス殿下は僕を見据え、

「ルーテシア嬢。俺の、いや私の妻になってください。私は貴女を心から愛しています。」

涙が溢れた。とてつもなく嬉しかった。目の前の彼が壮絶に愛おしかった。

「ル、ルーテシア…？」

潤む瞳に焦る彼が歪んで、自然と出た。

「僕も…いいえ。私も、ユリアス殿下をお慕いしています…心から。」

「ルーテシア…！じゃあ…！」

嬉しくて嬉しくて、このまま彼の広い胸に飛び込みたい。けれど、それではいけないのだ。この人の隣に立ちたくて、この人の帰る場所になりたくて、僕は決心したのだ。今ここでそれを違えるわけにはいかない。

僕は服の袖で涙を拭い、彼に向き合った。これから先の未来、その果てまでも共にあるために。

「ユリアス殿下をお慕いしているのは、本当です。…けれど、妻にはなれません。」

「なっ！？」

狼狽するユリアス殿下から一歩下がり、僕は精一杯笑って言った。
「…まだね。」

心の中は、子供のようにはいしゃいでいる。いつか貴方とのこの三歩の距離を埋めて、きっと捕まえるから。

第二十話（後書き）

これは貴方の一欠片。けれどもその生き様に、触れて触れていた
いのです。

幕間七 ユリアス

これほど欲しいと思ったものはなく、執着心に戸惑ったこともなかった。だけでもそれは、この身の内をこれでもかと焦がし続ける。お前がいいのではない。お前じゃなければいけないのだ。愚かなこととわかっている。わかっているのに止まらない。

だから、お前が、ルーテシアが兄上と話しているのを見て動揺した。その手が兄上に伸びるのを見て激高した。

「ルーテシア……！」

それが届くのを見たくはなくて、思わず飛び出し、叫んだ。俺を突き刺すその瞳は、驚きに揺れて切なく澄んでいた。

同じようで、同じではないのだろうか。俺と、お前の間にあるこの感情は。

呟くように俺の名を紡ぐ兄上に、低く尋ねる。

「……何を、やっているんですか、兄上。」

最初にルーテシアへ声はかけられなかった。きっと、俺はお前を責めてしまうから。何故、俺ではなく兄上なのだと理不尽にも責めてしまうから。そして、そんな弱い自分を見せなくなかったから。それが酷く悔しかったから。

「ユリアス。僕は、お前が僕の弟である以上、お前にはふさわしい女性をと考えている。」

兄上が俺を想い、ありとあらゆる障害を排除していたのは知っていた。それがたとえ人であっても。ああまたか、と感じずにはいられなかった。ルーテシアを認めないとでも言うのだろう。そう思ったからこそ、俺は眉を顰め兄上を睨んだ。けれど……

「でもね、たとえその女性が現れても、お前が彼女を傷つけているようでは認められない。」

本気で欲するなら、ルーテシアの全てを受け入れる。その強さがなければ諦める。そう兄上は言った。兄上はルーテシアを認めた。俺にふさわしいと、いや俺にはもったいなさすぎると。

ああ、そうだ。俺はなんの覚悟もなかった。満足していたのだ。これが終わりと勝手に完結していた。俺が王子だから、身分の高い者だからと、お前を計った。俺のものにならないはずがないと。

ただの男になるのが怖い。ただのユリアスでは、お前に欲されることはないのではないかと怖い。

「…えっと、お菓子…食べます、か？」

お前はか弱く立っているようで、そうではないのだな。まるで柳のよう、と思った。ゆらりゆらりと優しく揺れて、くるりくるりと笑うのだと。

「一緒に…一緒に食べよう、ルーテシア。」

零れた言葉が震えた気がした。それでも。

何を話せばいいのかわからない。フィナが来て、俺が慌てる間にルーテシアは傷ついていた。悪いこととは思うが、期待してもいいのだろうか。お前が俺を想い、傷ついたのだと。

声をかけると、同じタイミングでルーテシアの声と重なった。発言の譲り合いは、俺が折れるとしよう。話さなければならぬから。ここで引いたら、本当に終わってしまう気がするんだ。

「はあ…。駄目だな、俺は。」

やっと気付くなんて。

「俺は、想いさえ伝えればそれでいいと思っていた。お前に、愛していると告げればそれでいいのだと。」

緊張が体を走る。一拍置いて、

「ルーテシア嬢。俺の、いや私の妻になってください。私は貴女を心から愛しています。」

真っ直ぐ届けた。いや、届けばいいと思っただけかもしれない。じつとルーテシアを見てみると、いきなり大粒の涙を流し始めた。何かいけなかっただろうか。もしか、嫌だったのだろうか。そう焦っている、

「僕も…いいえ。私も、ユリアス殿下をお慕いしています…心から。」

求めていた答えが返ってきた。ルーテシア…！けれど、続いたのは拒絶。

「ユリアス殿下をお慕いしているのは、本当です。…けれど、妻にはなれません。」

「なっ！？」

何故？まだ俺には足りないものがあるのか？…違う。ルーテシアの眼を見て感じた。一歩下がった彼女の、これは覚悟だと。

「…まだね。」

微笑んだ彼女には、俺との未来が映っているに違いない。だってそうだろう？ルーテシアの瞳には、この俺が微笑んでいるのだから。

誠実であろう。偽りのない愚かな俺でいよう。愚かな俺は、誰より何よりお前に誠実であろう。この三步の距離が縮んだら、二度と逃がしはしないさ。

幕間七 ユリアス（後書き）

移ろい往く日々の、枯れ逝く花の香りさえお前とならば愛おしく
感じるものさ。

第二十一話（前書き）

お待たせしてすみません。今回、少し短いかもしれませんが…。

第二十一話

「待つさ。」

彼は言う。

「もつといい男になって、お前の前に立ち続ける。」

それ以上いい男にどうなるのかな。そう思うけれど、言うてはやらない。その代わりに、

「なら、僕はそれよりいい女になります。」

貴方がいつだって帰ってきたいと思えるような。

男としてこれからも生きていくのだと、そう思っていた。リーの為に、自分の為に、それが一番幸せだと。けれど、彼に、ユリアス殿下に出会ってしまった。リーに対して、罪悪感がないわけじゃない。もう呪いのようにこびりついている母の言葉も、裏切ることになる。それでも、この人について行きたい。…僕は、女になる。

かさり。落ち葉を踏む音がする。その音の方向には、

「そうやって、貴女は私から全てを奪っていくのね…？たかだか、使用人風情が…！」

「フ、フィニナ…。」

フィニナ様の瞳は、僕が憎いと叫んでいた。

目を、逸らすわけにはいかなかった。どんなに憎まれようと、もう、嘘はつかなかった。

「フィニナさ、」

「黙りなさい！！貴女の声など聞きたくないわ！！」

そうして叫ぶ彼女の喉は、だんだんと震えて、僕を射抜く瞳には静かに涙が溜まっていった。それでも、けてその涙を流すまいと、フィニナ様は真っ直ぐ立っていた。

強い人なのだと思う。僕には無い、本当に気高い人だと。ここで謝りの言葉などを吐けば、それは侮辱にしかないだろう。だから、貴女と同じ舞台に立つ。謝りなどしない。せめて虚勢でも気高く。強く。

「僕は、」

「黙りなさい。」

「ユリアス殿下のことを、」

「黙りなさい！」

黙れません。黙れ、と言いながら貴女は僕に手出しをしないではないですか。貴女ほどの方ならば、僕を叩こうが何しようが然程の問題にはならないはず。気に入らなければ、僕のようなものは切って捨てられるものです。僕は貴女がさっき言ったように、『たかだか使用人風情』なのですから。

「ユリアス殿下のことを、心から愛しております。」

フィニナ様は正面にいる僕にしかわからないように、寂しげに笑んだ。フィニナ様、悲しいほどに貴女は優しいですね。こんな風に思うことも、きっと失礼なことでしょうが。

「とんだ雌狐がいたものね。まさか…男とも女ともわからない使用人が、王族に手を出すなんて。」

「フィニナ！」

「ユリアス様もユリアス様ですわ。何故、このような出来そこないを相手になさるのです。」

胸が痛かった。出来そこないと言われたことではない。フィニナ様の、不器用な優しさが痛かった。

「フィニナ、いくらお前でも…！」

「許さない、とでも言うのですか？ですが、所詮は使用人。認めないとおっしゃる方など、私以外にだって、吐いて捨てるほどいらっしやいますわ。」

この言葉には、流石にユリアス殿下も口を紡ぐしかなかった。

はぁ。とため息をついて、フィナ様は少し赤くなった瞳を、僕に向けた。

「私は、貴女を認めるわけにはいかないわ。…ずっと、ずっと、貴女より長い時間ユリアス様だけを想ってきたのよ。」

その年月を、ただただ真っ直ぐユリアス殿下へと捧げてきたのだろう。だからこそ、彼女の言葉はこんなにも深い。

だから。とフィナ様は続ける。

「だから、私と同じ条件を手に入れなさい。…話はそれからだわ。」

去りゆく背中が、酷く綺麗に見えた。

儚い薔薇とは、あんな風だろうか。そうやって、僕は苦笑しながらもフィナ様に憧れずにはいらなかった。

第二十一話（後書き）

美しい薔薇には棘がある。その痛みが、深い深い優しさなんて誰も気づきはしないけど。

第二十二話（前書き）

お久しぶり、ですよね。すみません…！

『それはまるで少女のように』第二十二話、お楽しみください。

第二十二話

「誠に勝手とは存じますが、僕……いえ、私をお二人の娘にしていただけませんか。」

十年間、大切な命の恩人の好意を無下にしておきながら、たった一人に恋をして、その方と共になるためだけに……だなんて、実に身勝手だとは重々承知だ。もちろん、それだけとは言わない。本当は、ずっとオルソン様の娘になりたかった。リーティアのように、誰にも咎められることなく、愛されたかった。本当に、お二人を愛している。けれど、フィニナ様の言う『同じ条件』であることには間違いないわけで。

あの後、フィニナ様は僕らより一足先に帰られたようだった。僕らは、アリオズ殿下のお誘いでここにいたため、今日はこちらに泊まることになった。

「ねえ、ルー。帰ったら、ちゃんとお父様とお母様に気持ちを伝えなきゃ駄目よ?」

「で、でも……。今更、何て言ったらいいのか……。」

「ルー様ったら、相変わらず臆病さんですわあ。」

「ひ、酷いな……ニナ。」

「そうよ、ニナ。臆病じゃないわ。ルーはただ、度胸が足りないだけなの!」

「え……。」「

「女は度胸、ですものねえ。」

三人寄ればかましい、とはよく言ったもので。三人で寝ても十分余裕のあるベッドで、僕らは夜更かしを楽しんでいた。いいや、楽しんでいたのはリーと二ナの二人だけかもしれないな。

「ところでえなのですがあ。リー様、アリオズ殿下と何かありましたのお？」

「へ？」

何のことだ。リーを見やれば、その花の顔はリンゴのように真っ赤であった。

「な、なんでそう思うのかしら！？」

「雰囲気が…そうですわねえ、初々しかったのですわあ。」

「ち、違いわ！あ、あの方とは、そ、そういうのではなくて…っ！」

あの、方？二ナ、面白いもの見つけた。みたいな顔をするな。全くもって面白くない！

「リー…まさかとは思うが…」

「ええ！？ち、違うの！わ、私、あの方を好いてなんか…あつ。」

「あらあらまああ！リー様にも春ですわあ！って、ルー様あ？いかがいたしました？」

そ、そんな…リーが、僕のリーが！駄目だよ、リー。それは、その反応は、どう考えても『好いている』って感じだよ、リー！

その後、僕は自分の問題と、リーのまさかの告白で放心状態。リーはあのまま真っ赤な状態で布団に潜り、二ナはいい夢が見れそうですわあ。とか言いながら布団に入って3秒で寝たらしい。

おそらく、この夜一番楽しんだのは、二ナではなからうか。

太陽が眩しい。というより、痛い。こんな不健康な朝を迎えたのはいつ振りだろうか。いろいろと考えすぎて、結局一睡も出来なかった。そしてふと、昨日の夜の会話を思い出す。

「…女は度胸、か。」

僕は、女になると決めた。でも、度胸っているのかな？

「度胸一つで、変わるものもあるのですわあ。」

「うわっ！二ナ、驚かさないでよ。」

この子はいつから起きてたんだろ。もう、メイド服に着替えているし。着替えてからまた布団に入ったのかな。…何で？

首を傾げる僕を尻目に、二ナはいつものようにニコリと笑った。

「ルー様、難しく考えずともよろしいのですわあ。どうしたらいいか、なんてことはどうしたいか、でいいのですものお。」

「二ナ…。」

「さ、朝食の準備が整っておりますわあ。リー様、起きてください。今日は、こちらの料理人の方と私が腕によりをかけて作ったのですよあ。」

二ナに揺さぶられて、リーがうーと唸る。微笑ましいな、と思っただが、それより気になることがある。

「僕、ずっと起きてたよね？」

「はい、起きていらっしやいましたわあ。」

「二ナ、料理作ってきたんだよね？」

「はい、ルー様に気付かれずに出て、さらに戻るのは至難の業でしたわあ。」

「そ、そうなんだ…。」

「ええ、燃えましたわあ！」

僕の幼馴染は、どこに向かっているんだろう…。

「もう、帰ってしまうんだな。」

「次にお会いできる時には、約束に近づいていますよ。ユリアス殿下。」

「そうか、それは楽しみだな。」

朝食を終え、僕らは帰ることとなった。荷物も積み終わり、あと

はオルソン邸に向かつて出発を待つのみ。ユリアス殿下が見送りに来てくださったのが嬉しい半面、少し寂しい気がする。僕はきつと、この人に一生振りまわされてしまうのだろうなあ、と思わずにはいられなかった。

「ルー！行くわよ！」

「あ、ああ！今行く！…ユリアス殿下、お元気で。」

「ああ。お前もな、ルーテシア。」

お辞儀をして、ユリアス殿下から遠ざかる。

馬車の中から、ユリアス殿下の姿が見えなくなるまで、ユリアス殿下の影を感じられなくなるまで、ずっと彼を見つめた。手を振ることをしたわけじゃない。何かを叫んだわけじゃない。それらが何故か、さよならを言うようで出来なかった。ただただ見つめた。いつかを願いながら、ただただ見つめることしか出来なかった。

「あら、眠ってしまいましたわねえ。」

「ふふ。きつと、疲れたのよ。」

ゆるく揺れる馬車の中。僕は、未来を瞼の裏で見た気がした。

第二十二話（後書き）

近くにはいなくとも、見えているのかもしれない。瞳の奥が、君を覚えているなら。

第二十三話（前書き）

PCって、立ち上がらなくなるものなんですね…！！いやあ、ほんと直ってよかったです。

また時間が開いてしまつて申し訳ありません。読んでくださっている皆様には、感謝感謝です！

では、「それはまるで少女のように」第二十三話。お楽しみください。

第二十三話

オルソンの屋敷は、何も変わってはいなかった。たったの二日で変わる筈もないと思うが、ただ空気だけがやわらかく感じていた。きつと、見えていなかったのだらう。ここが、こんなにも優しい場所であったことを。

「おかえりなさい、リーティア、ルー、二ナ。」

「お母様！」

「ただいま戻りました、サーシャ様。」

「ただいま戻りましたわあ。」

この人の瞳の温かさ、何も変わりはしない。けれど、こんなにも深かっただろうか。サーシャ様の瞳の色は。

「さあさあ、長旅で疲れたでしょう？中で少しお休みなさいな。お父様も、首を長くして待っていていらっしゃるわ。」

「はい、お母様。行きましょ、ルー！二ナ！」

「ちよ、ちよつと、僕は荷物を……。」

「私は父様に報告に参りますわあ。荷物の方も、お任せくださいませえ。」

「え、でも。」

強引なりーに連れられ、有無を言わさぬような雰囲気の下二ナに見送られ、僕は屋敷へ入った。扉が閉まるその向こうで、サーシャ様が微笑んでいた。今まで見てきたどの微笑みよりも、優しく。

「ただいま戻りましたわ、お父様。」

「おお、おかえりリーティア。ルーもご苦労だったね。」

「いいえ、とんでもありません。」

モルテナ様とリーが席に着き、僕はその少し後ろに控える。後から入っていらつしゃったサーシャ様も共に、とても楽しそうに話している。

時折質問も交えながら、うんうんとリーの話を聞いていたモルテナ様が僕に顔を向けた。

「ルーは、どうだったんだい？」

「僕、でございますか？」

「楽しかったかい？」

「ええ、とても。」

モルテナ様は、僕の答えに目を細くして笑った。ほんの少し出来た目尻の皺に、何故かとても安心する。

「それでね、お父様、お母様。これ、お土産にいただいた紅茶なのだけど、飲んでみませんか？」

「おや、それはいいな。ルー、入れてくれるかい？」

「はい、かしこまりました。」

最高級の紅茶を丁寧に入れる。お茶には、入れた者の気持ちが出るのだという。丁寧に、丁寧に。優しい気持ちになれるよう。僕の気持ちが入るよう。そうして、静かな時が流れる。僕は、こんな穏やかな時間が好きだ。

「うん、美味しいよ。ルー。」
「流石ね、ルー。」

モルテニア様もリーも満足してくれているようだ。そして、サーシャ様も。

「ええ、とてもいい香り…。ルーの入れてくれた紅茶は、いつも美味しいわ。」

いつもの笑顔に安堵する。ああ、よかった。
でも、そう思ったのも束の間。今日は、いつもとは違う一日だったようだ。

「う、ぐっ…！」

「サーシャ！？」

「お、お母様！？し、しっかり…！」

「ぼ、僕お医者様を呼んできます…！」

サーシャ様の顔が一瞬歪んだかと思えば、サーシャ様はお腹を抱えて蹲ってしまった。何が起きたのか。僕には全速力で駆けだして医者呼びに行くことしか出来なかった。

「ご懐妊です。おめでとうございます、サーシャ様。」

「こ、子供…？私のお腹に、命があるというの…？」

「その通りでございますよ。」

「おお、サーシャ。なんと、なんとめでたい！」

「あなた…！私…っ！」

新しい、命。サーシャ様の中に、新しい命がある。あんなに子供の欲しがっていたお二人だ。感動も人一倍に違いない。リーティアも、お二人の傍で泣いている。一番傍で、お二人の娘として過ごしてきたのだ。その想いも、痛いほどよくわかるのだろう。

サーシャ様ご懐妊。その知らせが屋敷中に届き、一気にお祝いムードとなった。しかし、サーシャ様の体に障るといけないということで騒ぐことなどはなく、皆この幸せに浸っているようだった。男児であるうか、女児であるうか。いいや、そんなことなどどうでもよい。ただ、健やかな御子がお生まれになればそれでよいのだ。そういった会話が、屋敷のいたるところで聞くことが出来た。古くから使えている人たちは、泣いて抱き合いながら喜んだそうだ。

もちろん、僕も嬉しい。モルテナ様とサーシャ様の子だ、きつと聡明で美しい子だ。そうか、リーに弟か妹が出来るのか。楽しみだな、これからもっと忙しくなる。

「張り切っていますわねえ。」

「二ナ。そりゃあ、張り切るさ。二ナは嬉しくないの？」

「もちろん、嬉しいに決まっていますわあ。今から、いろいろと揃えに行くところですよ。」

二ナは本当に嬉しそうに笑っていた。けれど、僕を見つめると少し複雑そうな顔をして、でもお…と続けた。

「でもお…どうするのですかあ？」

「どうするって？」

「ルーテシア、貴女は条件を手に入れるのではなかったのですか？」

ああ、忘れていた。

「そんなことは、今必要なことではないよ。」

そうやって笑うしかなかった。眉を顰める二ナが、やけに小さく感じた。

第二十三話（後書き）

開きかけた花の蕾は、閉じて、また開く。

第二十四話（前書き）

先代のPCがお亡くなりになりました。今まで書き溜めたものが、
バアン！になりました。泣きたいです。

とりあえず、PC新調しました。更新はリアルが今忙しいので、
まちまちになるかと思いますが、今後ともよろしくお願いいたします
すっ！！

第二十四話

『ルーテシア。』

優しい声が聞こえる。暖かい声が聞こえる。大好きな声が聞こえる。

ほんの少し。ほんの少しだけ、耳を塞いでもいい…？

「弟かしら？妹かしら？」

「ふふ。リーティアはどちらがいいのかしら？」

「私は、どちらが生まれても嬉しいですわ！」

「そうね、元気で生まれてくれればそれでいいわね。」

和やかな空気が、部屋を埋め尽くす。サーシャ様のご出産の準備や、その後に必要となるものはすべて手配済みだ。後はただ、御子が健やかにお生まれになるのを待つのみ。

モルテニア様も、私は何をすればよいのだ！と走り回り、使用人全員で止めるほど大慌てなされた。お二人にとって、初めての御子。大騒ぎする気持ちもわかるのだが、止めるこちらの身にもなっているものだ。その上、サーシャ様は初めての出産にしては高齢である。いや、そんなことを微塵も感じさせないほど、お若い容姿でいらっしやられるが。

「名前も決めてあげなければね。」

サーシャ様が、ご自分のお腹を愛おしそうに撫でながら呟く。

「お父様はなんて？」

「そうねえ…あの人も悩んでいるようだけど…」

「ええ。モルテニア様は毎日、執務室で本を片手に唸っていらつしやいますよ。」

「本？ルー、何の本？」

「確か、失敗しない名付け でしたか…。」

三人分の笑い声が部屋に響く。このまま何事もなく、平和にすべてが済むことを祈ろう。僕の心は、まだもう少しだけ閉じたままで…。

「貴女は条件を手に入れるのではなかったのですか？」

そうやって眉を顰めた二ナ。彼女とは、ここしばらくまともに会っていない。お互い忙しいこともあるが、僕のほうが会い辛かったのだ。人一倍心配性の二ナは、きっと今の僕をいように思っていないだろうから。

「どうしたものか…。」

「どうもこうもありませんわぁ。」

「ういつ！？二、ナ。」

「はい、二ナですわぁ。」

いつもと変わらない…のだろうか。彼女は、自分の感情を隠すのが本当にうまい。それは二ナの本質に関わってくるからだから、僕には何とも言えないけれど、笑っていても怒っていないことがないとは言えない。

「ごくり。と僕が喉を鳴らすと、ニナはやれやれとでも言うように両手を振った。

「別に怒ってなどいませんわあ。用がありましたのお。」

「え、僕に？」

「ええ。ルーテシア、サーシャ様がお呼びですわあ。」

「サーシャ様が？」

何の御用だろう…。ニナと別れ、サーシャ様の部屋と向かう。すれ違いざま、ニナが何か呟いたようだったが、聞き返すことは出来なかった。

「ルーテシアでございます。お呼びでしょうか、サーシャ様。」

ドア越しに話しかけると、中からサーシャ様の声がする。

「入りなさい、ルーテシア。」

「失礼します。」

静かに中へ入ると、ソファに腰掛けるサーシャ様。大きな窓から差し込む夕日の赤が、サーシャ様を美しく彩っていた。

「おいで、ルーテシア。私の子。」

「えっ…。」

私の子。サーシャ様は、今そう言ったのだろうか。予想だになかった言葉に硬直する僕を、サーシャ様は優しく見つめている。

「僕は…。」

「十年間。十年間よ、ルーテシア。」

僕の言葉を遮って、サーシャ様は続ける。

「あの日、私は貴女を止めることができなかった。けれど、止めてはいけないのだとも思っていたわ。リーティアを守ることが、貴女をこの世に引き留めていたのだから。」

優しい、優しい笑み。そして、どこか寂しげな瞳。僕は、サーシャ様の言葉にただ耳を傾けることしかできなかった。口を挟んだら、もっとサーシャ様の瞳が悲しくなるような気がして。

「けれど、もう違うのでしょうか？もっと大切なものが、見つかったのでしょうか？求めていたものが、わかったのでしょうか？」

この方は、知っているのだ。ずっと、知っていてくれたのだ。それでも、僕のために待っていてくれたのだ。

鼻の奥がツンと痛い。視線が揺らぐ。瞳が潤む。

「お前を、他人だなどと思ったことは一度もない。私たちは、お前を愛しているよ。」

「モル、テニア…様。」

いつの間に部屋に入っていたのか。いいや、そんなことはどうだっていい。ああ、なんて、なんて自分勝手な純情であったのだろう。もっと、縋ってしまえばよかったのだ。理解したふりなど、止めておけばよかったのだ。僕の汚い部分など、この優しい人たちには御見通しであったのだから。

「ルーテシア。遠慮なんて、初めから必要ないのよ。」

「聞かせておくれ、ルーテシア。私たちが十年間待ち望んだ、お前の言葉を。」

涙を、堪えることなど出来ない。次から次へと、限りを知らぬかのように流れ続けた。嗚咽を漏らすなど、いつ振りであろうか。ユリアス殿下の前でさえ、これほどみっともなく泣き叫びはしなかったのに。

モルテニア様とサーシャ様は、僕は落ち着くまで傍にいてくれた。頭や背中に触れるお二人の手が、どうしようもなく温かくて、愛おしくて。気が付けば、このあまり大きくはない両の腕で、強くお二人を抱きしめていた。

「…父様、母様。ごめんなさい、そして…ありがとうございます。」

「おお、ルーテシア。謝ることはない。父と呼ばれるこの日を、私は待っていたのだから。」

サーシャ様：母様は、何も言わなかった。いや、何も言えなかったのかもしれない。僕の耳元で、声を押し殺して泣いていたから。

神様、僕はこの世界に生まれて本当によかった。初めてこの世界に、降り立った気がします。

第二十四話（後書き）

君のつま先が、世界に波紋を広げる。歩こう。絶えず世界を揺らすため。

幕間八 サーシャ（前書き）

どうも！リアルでの忙しさが、やっと一段落つきました。まあ、この先もちよいちよい忙しい日が続いたりするんですが…。

今回はサーシャ様視点です。長くなりそうなので、二つに分けます。

幕間八 サーシャ

あれはそう、十年前の忘れもしない運命の日。私たちの、娘たちに出会った日。

「憂鬱ねえ。こつも雨が續くと。」

「六ノ神月でございますから。」
ろくのかみつき

「六ノ神も、早く泣き止んでくださればいいのだけど。」

「神は氣まぐれで御座いますゆえ。」

その日は、六ノ神の涙　？雨が降っていて、庭に出ることも、大好きな日向ぼつこも出来なくて、さらに旦那様であるモルテナアも急な仕事だと言って執務室に籠ってしまっていた。

「つまらないわ。」

「奥様、旦那様ももうすぐお歸りになられるでしょうから、それまでは。」

「わかつているわ、ローク。でも、楽しみにしていたのに…。」

「奥様…。」

私は今日、モルテナアとデートの約束をしていた。結婚してからほとんど二人で出掛けることなどなかったから、年甲斐もなくはしゃいでいたのが悪かったのだろうか。

たとえモルテナアが戻っても、この雨ではね。そう思って、私は

雨が打ちつける窓の傍へと寄った。雨の温度でヒンヤリとした硝子の向こうを何ともなしに見やると、屋敷の門の前で何か蠢く小さなものを見つけた。

「あれは…?」

「いかなさいました。」

ロークへの返事も忘れて、私は必死に目を凝らした。雨の隙間、あの小さなものが気になって仕方なかった。もしかしたら、あれは…。

「サーシャ!!!」

部屋の扉を飛ばすような勢いでモルテニアが入ってくる。多分、私のために急いで仕事を終わらせてきてくれたんだろう。ああ、とっても嬉しい。愛してるわ、モルテニア!でも、そんなこと言ってる場合じゃないの!

「どいて!」

「え。サ、サーシャ!？」

「奥様、どちらへ!」

私は走った。使用人たちが止める声も聞こえたけど、止まらなかつた。いいえ、止まらなかった。雨にドレスが濡れることも、構いはしなかった。私は門まで走って、走って、走って、そうしてその子たちを見つけたの。

「はあ、はあ…あなたたち、大丈夫!？」

「え…。」

「だ、だあれ？」

そこにいたのは、小さな女の子が二人。姉妹であろう二人は、泥に塗れて痩せこけ、長時間雨に打たれていた為か、寒そうに震えていた。衰弱しているのは目に見えて、どちらも立っているのがやつとであるような風だった。

「き、貴族…。」

姉のほうที่震える声で呟く。青白い腕が、健気にも妹を守るように上げられ、その小さな背中に彼女を隠した。

その妹の方はと言うと、なんだか落ち着きがないように手を動かし、見えない何かを探しているようで…見えない何か？私とはっさに、妹の方の瞳を覗いた。無造作に伸ばされたままの金の　？もはやその面影はほとんどないが　？髪の間にあるそれは酷く濁っていて、焦点が合わず、一塗りの色も映していないであろうことがわかった。

「あ、あなた目が…!」

思わず手を伸ばすと、手の甲にささやかな衝撃が走った。弱弱しいものだったが、確固たる意志が感じられて、そちらを向いた。姉の方が歯を剥き出しにして私を睨む。中途半端な高さで止まっている手が、恐らく私を叩いたのだろう。

「リーに、触るな!」

いきなりそうやって叫ぶものだから、彼女はげげほと噎せ返ってしまった。これほど衰弱しているのだ、無理もない。

目の見えない妹、それを守る姉。どちらも衰弱しているが、見た限り姉の方が酷い。今まで手に入れた食料なんかは、ほとんど妹に与えていたのかもしれない。どうして？どうしてこんなことに？いえ、世界中にはこんな風に生きていくしかなく、そして満足に食べることなく死んでいく子供たちが大勢いる。この子たちはそのうちの二人だけ。わかっているのに、憤りが収まらない。

どうしてなの、神様…。

初めて出会ったはずの二人の少女を、私はどうしようもなく抱きしめたくて仕方がなかった。

幕間八 サーシャ（後書き）

【要らないかもしれない設定】

・この世界の一年は十二か月で、それぞれ数字の神様がいます。一月は一ノ神、二月は二ノ神…という感じでその月を守護しています。その月自体を神月と呼びます。今回は六ノ神、つまり六月ですね！六ノ神は、泣き虫なのでめっちゃ雨です。

次回もサーシャ様です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6882q/>

それはまるで少女のように

2011年11月30日10時51分発行